

---

# 消えない絆

ちか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

消えない絆

### 【Nコード】

N6069M

### 【作者名】

ちか

### 【あらすじ】

平成25年4月6日。最新の科学技術を使ったゲームが発売された。

この物語はある少女がこのゲームをクリアするまでを描いた物語である……。

RPGのゲームの中、友情が試されるかもしれない冒険の数々！ほぼコメディーの目指せ爆笑小説！  
全ての物語はココから始まった！？

御感想をお待ちしております！！

なお、この作品は静雄のキャラ崩壊オンパレードです。それでもいい人のみが見てください。

## プロローグ（前書き）

プロローグを第一話から切り離してみました！！

別に見なくても大丈夫です。

## プロローグ

平成25年4月6日。最新の科学技術を使ったゲームが発売された。その名も『剣と魔法の勇者達』という、極めてネーミングセンスの欠片もない題名の勇者が魔王を倒すという、典型的なRPGだ。難易度もそれほど高くなく、初心者向けの様なRPGだが、最新科学技術を使っているためか、人気は高く、発売初日は僅か30分で完売したほどだ。

そして、発売から約3年という月日が経ち

この物語はある少女がこのゲームをクリアするまでを描いた物語である……。

## 冒険の旅へ！（前書き）

『小説を読もう！』の初心者ですので、読みにくいかもしれません  
がよろしくお願いします！

## 冒険の旅へ！

『ログインが完了しました。では、冒険の旅へ！』  
そんなプログラムの声がしたかと思うと、誰もいなかった丘の上に一人の少女が立っていた。

「ここがゲームの中か……とてもそうには見えな  
いんだけどな……」

一人つぶやくこの少女がゲームで設定している名前は『フウ』。  
フウはまるで忍者の様な服を着て、腰には短刀をつつてあり、ポシ  
エットが付いている。頭には『忍』と書かれた鉢巻を巻いている。  
右目は長く伸びた銀色の前髪で隠れ、一見するとクールに見えるが、  
見えている左の目はキラキラと、好奇心で輝いている。

「まずは仲間を見つけてパーティーを作らないとね」  
ニコニコと笑いながらそういつて丘を下り、この村の出口へと向か  
う。

あ、ちなみに今フウがいるこの村は『始まりの村』つって、このゲ  
ームにログインした後、一番最初にいる村のことだ。ここにあるの  
は丘と時計台だけだからな、わざわざこの村にくるプレイヤーはい  
ねーから、基本的には誰もいない村だ。

まあ簡単に言うと、この村から出て、次の村ぐらいまでいかないと  
仲間には会えねーことだな。うん。

「てか天の声。あんた他の文としての機能だけじゃなくて、ちゃん  
と意思があるんだ。てか何一人で納得してんだよ」  
無いと思ってたのか……。ま、普通はねーな。

てゆーか他の文にいちやもんとかつげんなよ。物語がおかしくなる

だろーがー！

「えー。やだ」

は？なんでだよ。

「いや、なんか面白いし」

あーすみません。作者さんですか？これからフウの名前、A子にしても

「すみませんでしたあー！自分調子こいてましたあー！（土下座）」

「……土下座つて……お前、プライドとか無いの？」

「A子よりみただからな」

A子よりましなんだ……プライド傷つくこと……ダセーな。

「うるせーなー。いいんだよ。私がいいと思ってるなら」

いいから早く進めろよ、ゲームを。物語が進まねーんだよ。

「いや、今までの無駄話でも行数稼ぎぐらいにはなってると思うけどね」

「……」

「あれ？スルー？」

「……」

「……もしかして急に他の文として機能しだったのか？」

「……」

「いや、せめて何か言おう！？私地味にさびしいんだけど！？」

「……」

「チッ」

舌打ちをしてしびしび歩き出すフウ。今からフウが目指すのは『クゴジ村』です。

「いや、そんなこと誰も言ってないけど？まあ向かうけどね」

いくんだったらよくね？……と、ここで一つ豆知識。『クゴジ村』

は逆から読むと、



『地獄村』です。

「誰だよこのゲーム作ったやつ！『地獄村』とか行きたくねーよ！」

『地獄村』じゃなくて『クゴジ村』ね。

「お前は黙ってる！ゲームオーイが再びはやるまで！」

それじゃこの物語が終わってもしゃべれない予感しかしないんですけど!？」

「……………」

無視かよ!!

と、そんな話をしていると、村の出口の目の前までに来た。

「よし!いくぞ!いざ、冒険の旅へ!!」

もう始まってんだがな!!

## 冒険の旅へ！（後書き）

どうでしたか？小説も初心者なため、面白くないかもしれませんが  
どうぞよろしくお願いします。

あと、感想などお待ちしてます！！

十月九日 編集完了

## 新しい仲間（前書き）

登場人物紹介はもうしばらく先になると思います。  
すみません。

## 新しい仲間

『クゴジ村』へ向かうため、草原をテクテクと歩いていくフウ。そんなフウに向かって走ってくる人影があった。おそらく女の子だろう。

「ん？なんか言ってる？」

近づいてくる人影が何かを言っているのは分かるが、何を言っているのかは聞こえない。

つか作者、空欄で表すなよ。明らかに手抜きだろ……。『うるせーよ。文字を小さくできないんだからしょうがないだろうdyちか』

へーへーそうですかい。

ま、とりあえず物語を進めるか。

フウが耳を澄ましてみると、

「たーすーけーてー！」

と叫ぶ声と、『ズドドドド！』と何かの大群が走ってくるような音が聞こえた。

「天の声、あれって魔獣かな？」

たぶんな……。あそうそう、魔獣ってのは、LV1〜LV100まである、魔王さんにより魔法で作られた獣のことだ。分かったか？

「天の声、誰と話してんの……。？てか魔王“さん”って……」

「読者だ。ついでに魔王に『さん』をつけたのは……。ま、ノリだ。」

「読者いたんだ。つかノリでつけんのか」

「……そんな事よりどうすんだアレ。」

「逃げよつかな。あの魔獣、LV1とLV2しかいねーけど大群だし。あの子、たぶんほつといても大丈夫だと思うぞ?」

「私は助けたほうがいいと思うな。仲間になるかもしれないし、ならなくとも恩が売れる。何ならその恩を使って仲間に引き込めばいい。」

「腹黒……」

「フフ。褒めても何も出ませんよ?」

「いや、褒めてねーし」

「ま、それは置いといて。どうすんだよ。」

「んじゃ、とりあえず助ける。仲間になるかはあいつの自由だな。」

「まあ仲間にならなかつたら……」

「フウはそれ以上言わず、ポシエツトからクナイを何本か取り出した。」

「初バトルスタートだね。……ま、ある程度近づいてからの参戦だけだ」

「おいおい……」

「あそこに行っても私じゃ全滅させることはできない。それならあの人を少しでも減らしてくれてからあの人を連れて逃げるのが得策だと思わないかい?ワトソン君」

「誰がワトソン君だ。誰が。」

「一方追われている女の子は……」

「ファイヤ!」

「ドゴン」

「ファイヤ!」

「ドゴン」

「ファイヤ!」

「プス……ン(ガス切れみたいな音)」

「え?プスンって……。ええい!もう一回!ファイヤ!」

「プス……ン(ガス切れみたいな音)」

「……やばいかも……多分これ……ギャー！やっぱMP切れてるし！」

魔獣に攻撃し、少しずつ数を減らしていたが、ついに大量にあったMPが切れた。

「やばいやばいやばい！だれかたーすーけーてー！！」

女の子がそう叫んだそのとき、

ヒュン

と、風を切る音が聞こえ、LV1の魔獣にクナイが突き刺さった。

「は？クナイ？つか誰？」

女の子が驚いて立ち止まる。

「ちょ、何立ち止まってんだよ！後ろ！」

「え……」

振り向いた女の子が見たのは迫り来る太いつめ……。直撃かと思われたその時、

「なめんなあ！」

女の子はとつさに杖で攻撃を防ぎ、そのまま押し返し、杖で殴る。カシヤアアアアアン

と、ガラスが割れるような音がして、魔獣は碎け散った。

「よし！そのままこっちまで来い！クナイで掩護すつから！」

「ういよ！……ん？つかなんで私が命令されてんだ？」

疑問を感じながらも、50mほど先にいるフウにむかって再び女の子は走り出した。

時折追いつきそうになった魔獣をクナイや杖で撃退しながら走る。

そして女の子がフウの元へたどり着くと、

「じゃ、こつちのほうが速いから」

と、女の子をおんぶした。

「な、何すんだよ！」

「いや、だからこっちのほうが速いからって……」  
フウが走り出す。

「だから何でおんぶって……って、速あ!!」

女の子は新幹線に乗ってる気分だった。しかもとびつきり乗り心地が悪い新幹線に。

「おえ、吐きそう……」

「吐くなよ、気持ち悪い」

「殺すぞ?」

「H A H A H A H A H A」

(こいつウゼエ……) 女の子

「そんな事より、後ろ向くなよ。視界が真っ白になりたくないならね」

「は?」

女の子は疑問の声をあげるが、フウは無視し、ポシエットから何かを取り出し、魔獣へ投げた。

カンッ

と、何かが落ちる音がし、一瞬視界が白に染まる。

「……は?今の何?つかどっちにしる視界が白くなったんですけど」

「え、閃光弾。それと、そんな細かいことは気にすんな。はげるぞ」

「閃光弾?何それ?それと私は別にはげてない!!」

「え、知らんの?馬鹿?あ、馬鹿か。つか別にはげるのは今じゃなくって将来だし。やーいバーカバーカ」

「死ぬ。お前死ぬ。野たれ死ぬ」

「んでもって閃光弾ってのは、忍者が最初っから持つてるアイテムのこと。相手の視界を数秒つぶせる」

フウは女の子の言葉を無視し、女の子を降ろしながら説明する。

「忍者?……ああ。確かに忍者だわ。服とか服とか服とか」

「だろ?頭の鉢巻なんて『忍』って書いてあるしね……ってさつきから『服とか』としか言っていないがな……」

フウが笑いながら言う。・・・いや、最後の方は苦笑いだつた。てーか、なんか打ち解けてんのなお前ら。名前すら聞いてないといふのに。さっきは殺すとか言ってたのに。

「あーそういや聞いてなかったな。私は『フウ』。あんたは？」

「私は『メウ』だ」

「そつか。んじゃよろしく、メウ！」

「おう！」

こうして仲良くなったかのように思えた2人だったが・・・

「あ、そうだ。メウ。パーティーに入んない？」

「やだ」

即答だつた。

・・・そんなに嫌かね？



「おいおい……え？私？うん、パスの方向性で。」

## 新しい仲間（後書き）

終わったところ変だったでしょうか？

感想、アドバイス、指摘など、皆さんよろしくお願いします！！

それと、ここまで読んでいただきありがとうございます！

まだまだ続きますよ！！（当たり前だけど）

十月九日 編集完了

## 新しい仲間 2 (前書き)

今回はちょっとおかしなところがあるかもしれませんが。

〜前回までは〜

メウというPCプレイヤーと出会ったフウは早速メウにパーティーに入らないか聞く

「やだ」 フウの申し出を0.5秒で断った人

## 新しい仲間 2

「なんでだよ！助けたじゃん！」

「ああ、それとこれは別ですから」

メウが物を横に置くような動作をしながら言う。

「あ、でも入ってあげなくもないんだよ？」

「本当！？」

「うん。ただし、500万Gを払えばね」

メウはニコニコと笑いながらそう言ってくる。

ちなみに『G』とは『ゴット』と読み、この世界の通貨として使われている。けしてキッチン黒い悪魔と間違えないように。

「払えないなら入らないよ？」

「……………このゲームを始めたばかりの人に500万Gも払えると思ってるの？」

「払えないと思ってる」

「……………それって遠まわしに入らないって言うてる？」

フウはメウの返答にキレそうになりながらもあくまで平静を装いそう聞いた。

「うん」

「何で入りたくないの？」

フウのこの質問にメウはフウがキレかけてるとも知らずに返す。

「だって足手まといはいらないし」

「……………」

フウは笑顔である。

「LV1のあんたがLV10の私についてこれるとは思えないし」  
「……………」

フウはまだ笑顔である。

「他にも色々理由はあるんだけど、簡単に言っちゃえば、弱いやつはいらないってことだね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ブチッ）」

フウがととてもとても綺麗な笑顔で・・・・・・・・キレた。

「ふうーん。へえー。そうかあ。弱いやつはいらない・・・・・・・・ねえ」

そういつたフウの手にはメウの杖が握られていた。

「あ、あれ？何で？」

メウは状況が掴めていない様で、フウが持っている杖と、杖を持っていた自分の手を交互に見ている。

フウは自分のポシエツトから、『転移結晶』を取り出した。

おい、それ明らかに中に入る大きさじゃないよな。それと何で持ってたんだ。

「転移、『ユーグラの森』」

また無視かよ・・・・・・・・。

あ、ちなみに『ユーグラの森』つーのは、LV30の魔獣の巣のこと。

なんでフウが知ってるのかは不明。

さらになんて転移できるのかも不明。

おそらく・・・・・・・・ギャグ補正かな？（や、までどこにギャグがあったbyちか）

キユオオオオオン

と、音がしてゲートが開くと、フウはそこにメウの杖を入れた。

「ちよ、何やってんだよ！」

メウが慌ててゲートの中から杖を取り出そうと、フウに近寄ったメウの足元にクナイが刺さる。

「え・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「取引しよーよ」

笑顔なのに殺気立っているようにしか見えないのは私だけでしょうかね？

「取引？」

「そ、取引。メウがパーティーに入れば杖は返したげる。逆にメウが断ればゲートは閉じる。」

「たしか魔法使いは杖がなきゃ魔法が使えないんじゃない？」  
「普通、魔法使いは杖から魔法を出すため、杖がないと魔法が使えないのだ。」

「なんで私が魔法使いだつて分かるんだ？」

「えーと、まずは杖。杖を持つてるのは魔法使いらへんの職業だからね。」

「でもその中にいる、『ブラック・マジシャン』、『サモナー』は杖が無くても使えるけど。」

「あとはさつきメウが使ってた魔法。『ファイヤ』は普通の魔法使いにしか使えない。」

「だから分かったんだよ」

「ふーん」

「メウは杖を取り返すタイミングを探しているようだが、意外にも（ココ重要）フウは隙が無く、取り返すことが出来ない。」

「さらに言うならおそらく、メウと私はそれほどLVが離れていない。『ファイヤ』は魔法使いが最初に使える下級魔法。MP、HPも多くない。これらのことを考えるとLVは・・・10前後かな」  
「くっ・・・」

「非公開設定になっているLVまで見破られ焦り始めるメウ。しかし焦ったところで状況が変わるわけではない。」

「で、どっちなのかな？入るのか、入らないのか」

「っ！そんな私に利益が無いような取引、受けるわけな」

ヒュン

メウの横をクナイが通り過ぎ、メウのほおから、血が一筋流れる。  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どちらかを選べつつってんの。入るのか、入らないのか。10秒以内に決める。」

それ以上は待たない」

ついさつきまで笑顔だったフウの顔から表情が消え、冷たく言う。

「カウントスタート。10」

「どうする？こいつの仲間になるか、ならないか・・・・・・・・」

「9」

（仲間になるといっておいて、後から抜けるか？いや、裏切りはさすがに気が引ける・・・・・・・・）

「8」

（LV30を相手にするのは苦しい・・・・・・・・）

「7」

（となると断って杖を取りに行くのは危険か・・・・・・・・）

「6」

（正直LV1と10じゃそれほど実力が離れているわけじゃない）

「5」

（一撃で倒すのは難しいか・・・・・・・・）

「4」

（よし、ここは仲間になろう。その方が命の危険性は低くなる・・・・・・・・）

いや、死んでもすぐ回復するんだがな。

「3」

（今すぐ黙るか死ね）

ひどくない!?!?

「2」

(ひどくない)

「……クスン。どうやらメウは現在心が荒んでいるみたいですよ……。」

「1」

「……わかった。仲間になる」

「よろしい」

そうメウにいったフウはゲートからメウの杖を取り出し、メウにわたした。

「……なんかーフウ(主)とーメウ(犬)って感じだな。」

「うるせー黙れ！殺すぞ？」

二人同時に言う。

二人とも、そんな殺気のこもった目で見ないでください。マジこわいっす。

「そんじゃメウ。これから『クゴジ村』に行くんだけどいい？」

「いいよ。私も行こうと思ってたし」

「行こうと思ってた？『クゴジ村』にまだ行ってないの？」

「行こうと思ったら魔獣の大群に襲われまして……。」

「……哀れ」

私の言葉を見無視し、そんな会話をしながらクゴジ村へとフウとメウは歩き始めた。

さっきまで脅し、脅されてたやつなのに完全になじんでますね。H

A H A H A

「「で、ここどこだと思う？」」

わからねーのかよ！！！！！！



## 新しい仲間 2 (後書き)

すっごい眠くなりながらやったので誤字・脱字が多いかもしれませ  
ん。

感想・アドバイス・指摘、などなど、どうかよろしくお願いします。  
ここまで読んでいただきありがとうございます。

もし出来たら、次回予告とかやっていききたいと思います。

十月九日 編集完了

## クゴジ村（前書き）

えーと、静雄が出てきます。ただし、キャラが崩れるです。それでもOKなことは第4話どうぞ。

## クゴジ村

「…………メウ、クゴジ村ってアレかな？」

ポシエットから取り出した地図を見ながらフウがメウにたずねる。

「そうじゃないかなあ……………」

メウが負のオーラを出しながらフウの質問に答える。

「暗いぞ、メウ。そんなんじゃないよ。これからの冒険は乗り越えられないぞ？」

「うるせーよ……………。私のこのテンションはお前のせいだろーが……………」

「……………？天の声、私何かしたっけ？」

いや、なぜそれを私に聞くんだ？つかテメー……………わからねーのか？

「うーん……………。わかんね」

「『わかんね』じゃねーよ！お前が道に迷った拳句、『LV上げた』から私が前衛いくから、メウは

バックアップよろしく！』とか言うから仕方なく後ろにいたけど、

お前バックアップいらねーじゃん！

何だよその強さ！LV1なのに！」

メウはLV上がらなかったんだよな。フウはLV5にまで上がったのに

「忍者の職業は基本身体能力値が高けーからな」

「そうゆう問題か！？明らかな差別だろ！作者ア！」

『ハハハ。ナニヲイツテルノヤラ。メウサンモ、レベル4もアガツテルジャンイデスカーby作者』

「それはフウのLVだああああ！！！」

白々しくカタコトで話す作者にメウはキレ、その怒りは姿が見えない作者ではなく、きちんと実体があるフウに矛先を向けた。

「ア、メウ。『クゴジムラ』ガミエテキタヨ。ハハハ、カケツコダ  
ー」

フウもカタコトでしゃべり、一目散に『クゴジ村』へかけていった。  
ちなみに棒読み。

「逃げんなー！！フウテメー！いつか絶対殺<sup>や</sup>る！」

:

「あ、来た。遅かったね、メウ」

「ゼエゼエ……。お前が……ハアハア……速すぎるんだよ……ゼエゼエ」

まったく同じ量を走っているにもかかわらず、息一つ乱していないフウにメウが悪態をつく。

「ほら、早く入ろうよ『クゴジ村』」

「ま、まで。少しは休ませろ……」

すると突然

ドゴオオン！！

と、何かが破壊される音が聞こえた。

「……？」

フウとメウが何事かと、顔を見合わせる。

「ちょ、ちょっとフウ、あんなにかしたの！？」

「え、なんか疑われてる！？別に何にもしてないよ！？ちょっとは仲間を信頼しようよ！」

「無理」

「信頼が無いのもここまで来ると笑えてくるね……」

そう言つて体育座りでシクシクと泣き始めたフウ。

あれ？笑えるんじゃないのか？

「うるさい……。でも誰が破壊音なんて出してんだろうね？」  
おお！ついさつきまでは体育座りで泣いていたとは思えない立ち直りの速さだな。

「気になることは気になるけど……。嫌な予感がする……」

「大丈夫だよ！ちよつと中を覗くだけだから！」

「本当かよ……」

メウは心配になりながらも、門から中の様子を覗こうとしているフウをなんかあつた時に止めるために

後を追つて、メウも中を覗きこむ。

「え？」

門の中を覗きこんだフウとメウが見たのは、金髪で、バーテンダーの服を着ている男だった。

ここまではいいのだ。ここまではまだぎりぎり町にいてもokだ。

(いや、若干アウトだbyちか)

しかし、その男が持っている物がありえない。

男は、道路でよく見る、あの『止まれ』と書かれた赤い三角が先に付いた道路標識だった……。

## クゴジ村（後書き）

静雄……、ほとんど出てきませんでしたね。  
でも大丈夫です！次回からは出番が増えますから！

次回予告（言葉のみ）

「『身代わりの術』！」

「死んでたまるかー！」

「『かまいたち』！」

「死ぬがいい」

「し、死ぬ」

少し嘘です。

十月九日 編集完了

平和島 静雄！？（前書き）

静雄のキャラ、崩れていてもおkな方はどうぞ。

平和島 静雄！？

「ア？（ギロ）」

「あ、見つかった」

フウとメウを見つけた男はなぜか標識を投げてきた。

つか標識を片手で持って投げられるとか。どんだけだよw。

「すごい怪力？なのかな？」

「いや、あんたらもう少し慌てようよ……」

特に何かするわけでもなく、普通に話をしてるだけのフウにメウがつっこむ。

「大丈夫だよ。究極奥儀があるから」

漢字がちがくないか？

「え、そなの？」 苦手科目：漢字

さあ 苦手科目：漢字

「おめーら……」

「まあそんなことより、究極奥儀」

「『身代わりの術』！」

「私を身代わりにすんなー！！」

フウはメウのことを羽交い絞めにして、盾にした。

「見たか！私の究極奥儀！その名も『身代わりの術』！」

「私を身代わりにする前に避けるという選択肢は - (グシャ) 全て言い切る前にメウに標識が刺さった。

あーこれは内蔵とか破れてんな。貫通しなかったのは奇跡だろ。

「……逝ったか」



この言葉だけ取ったらかっけーと思うんだけどな。  
ライバルが死んだ人の言葉……みたいな？

「ツチ。はずしたか。まーいや。まだまだ弾（標識）はあるから  
よー（ズボ）」

そう言つて男・もうめんどいから静雄でいいや。似てるし。は、  
何処からともなく標識を取り出し、フウに投げつけた。

「なめるな！忍法、『かまいたち』！」

「忍法はさすがに無しだろテメー！」

「ありだ！とゆうわけでいけ、『かまいたち』！」

………シーン

「あ、やっぱ出ねーか。『かまいたち』」

フウが何かに納得した様にうなずく。

いや、出ねーならやんなよ。

「えーと、じゃあ……『真剣白羽取り！』」

ガシ！

「……あ……つかめ……なかつ……  
た……（バタ）」

フウの意識はそこで途絶えた。

：

「ん……？ここ何処だ……？」

メウが目覚めたのはどこかの宿の部屋だった。

「ん、ああ！めー覚ましたか！さっきは悪かったな。オメーを狙つ  
てたわけじゃねーんだ」

そうメウに声を掛けたのは金髪で、浴衣？を着た、いかにも怪しそ  
うな男だった。

「……………誰？」

「あ、うんまあそんなるよな。俺は…」

「たのもー！！」

男の声をさえぎって部屋に入ってきたのはフウだ。

……………あー……………そーいやいなかったな。

「そっいえばいなかったね」

「死ぬがいい」

自分のことを忘れられていたフウはメウにクナイを投げた。

「るっせー！！テメーら黙れねーのか！！」（怒）

そっついたのはいつの間にかいた静雄だ。

静雄はフウが投げたクナイを標識で叩き落とした。

「あ、あんたは……………誰だっけ？」

「……………」（怒）

「あ、さっきのバーテンダーの人だよ。多分」

「いや、知らんよ。フウに盾にされたから。見るヒマもなかった」

「……………」（怒）

「一回見たじゃん。門のところだ」

「覚えてない」

「え？意外と影薄いのあの人」

「影薄いだア……………バーテン服のヤツだアウルセーんだよ（ズボ）」

静雄は標識を取り出し投げようとかまえた……………。

平和島 静雄！？（後書き）

「ちよつと小話」

静雄：静

フウ：フ

メウ：メ

天の声：天

作

者：作

天：いやー静雄出てきたね！

フ：つかあいつの名前静雄で合ってるの？

メ：それは本人に聞いたほうがいいんじゃない？

フ：ん、そつか。じゃあ静雄ー。ちよつと来てー！！

静：ア？なんだよ。

フ：静雄の名前って『平和島 静雄』だよな。

静：だからなんだよ？

フ：いや、静雄で名前が合ってるのか聞きたかっただけ。

静：そんだけかよ！

作：まあまあ落ち着けよ静ちゃん

静：ア？オメー今何だった？

作：い、いや別に何もいってないよー。ハハハ。（逃げ）

静：逃げんな！作者ア！！

ドゴーン！！

メ&フ：それではまたー！

天：ここで終わらせんのかよ………。

わまた。（笑）

作：で

作者……静雄のこと嫌いなのか？（前書き）

今回の話はフウがほとんど出てきません！すみません！

あ、ちなみにフウって私の性格を反映させたキャラなんですよ。

作者……静雄のこと嫌いなのか？

「ところであの標識何処から取り出ししてるのかな？」

標識を投げようとしている静雄を無視してメウに話しかけるフウ。

「え……？なんかの魔法じゃないの？」

「私は体に生えてんじゃないかなー？って思ってたよね」

「生えてるわけねーだろ！死ねー！！」

静雄は標識をフウに向かって投げた。

「究極奥儀『みが』」

「二度も同じ手をくらうかー！！！！」

またメウのことを身代わりにしようとしたフウの顔面を殴り、安全圏へ移動するメウ。

「いったー！！」

そう叫ぶフウにグサ！と、標識が突き刺さる。

「グハッ！（ボタボタ）」

「……フウ？生きてる？」

「し、死ぬ（バタ）」

「フウー！！！！！！」

「いや、俺のせいでもあるけど、お前のせいでもあるよ……」

冷静にツッコミをいれる静雄。

「静雄が標識投げるからいけないんだよ。避けるのは当たり前でしょ」

「ならなぜ殴る……？」

「……反射的に？」

「なぜ疑問符？」

「……それは置いて、何処からだしてんの？その標識」

「（話し逸らしやがった……）いや……わかんねーならやって見せようか？（ズボ）」

腰から剣を抜くように標識を取り出す静雄。

「……えー。なんか普通すぎて逆に拍子抜けなんだけど……」

がっかりしたように肩を落とすメウ。

いや、その前に明らかにおかしいだろこれ！標識ってかなり長いから腰にあつたら引きずってるだろ！

「いや、なんかそうゆうの今までの冒険でもうなれっこー」

「いやいやいや、何テメーらで勝手に話進めてんだよ！よく見やがれ！！地面から生えてんだろ！『剣を抜くように……』じゃねーよ！いつペン出て来い作者アアア！ぶん殴ってやる！」

『殴られるのはいやだから天の声代わりに行ってきたくんね？by 作者』だそうです。

ちなみに私も殴られるのがいやなので行きませんが。

「作者も勝手だねー」

メウが遠い目でいう。

『うるせー殺すぞ？』

すると後ろから突然声が聞こえた。驚いた静雄とメウが声のしたほうを見ると、そこには赤い色の髪をした少女がいた。

「いや、誰だよあんた！」

メウと静雄が同時に声を上げるが少女は特に気にせず、話を進める。

「あ、私作者です。どうも」

ちがう、ちゃんと自己紹介した。律儀だなー。

「作者かよ！」

メウが驚いたように作者にいった。ちなみに静雄は、  
「……（ガシッ、ヒュン）」

無言で作者にコンビニのゴミ箱を投げつけた。しかし

「あ、言っておくけど私、実体が無いから攻撃はあたんないよ？」  
ゴミ箱は作者をすり抜け、後ろのコンクリートの壁に当たり、穴を開けた。

静雄、お前強いな。

「……………（啞然）」

メウは口を開いたまま硬直し、作者はニコニコと笑っている。

「…か作者。いいかげん体返しやがれ。ウザイ。」

「……………は？」

メウと静雄が私の言葉に驚いた声を出す。何を驚いているんだこいつらは。

「いやいやいや、天の声お前体あつたのかよ！必要なくね！？」

失礼な！体ぐらいあるよ！この世界の中で体がないのは作者だけだからな。

「あれ？じゃあさつき静雄が投げたゴミ箱がすり抜けたのは？天の声の体なら実体はあるんじゃないの？」

あれは映像だ。映像には攻撃があたんねーからな。

「あーなるほどね」

「なんか納得いかねーんだよな……………（ん？あ、そうか映像を映してるやつと一緒にブチ壊せばいいのか……………）」

作者の下にあつた映像を映しているへんな機械（今まで誰も気が付かなかつた）を窓から外に投げる静雄。

ドゴーン！！

「よし、壊れたか」

外から聞こえる爆発音を聞いて少しスッキリした顔をする静雄。

あれ？今ガッツポーズを小さくとっていた気が……………気のせい  
か。

……………ところであんたら。フウは？

「……………あ……………」

作者……静雄のこと嫌いなのか？（後書き）

（ちよつと小話）

フ：メウ。この作品の総合評価。何点だか知ってる？

メ：ん……。？何点だろ……。？

フ：実は……。この作品の総合評価。27ptになったんだよ  
！！

メ：マジか……。？

フ：マジ。

メ：……。おっしゃー！！フウ、今日は飲むぞー！祝いだ  
祝い！

フ：いや、まだ未成年だよ。静雄以外。

メ：酒じゃなければ大丈夫！！

フ：じゃあ勝手にやってる。

メ：そーですか。（しよぼん）

フ：てか祝う前にやることがあるだろ？

メ：あ、なるほど。



全頁…読者の皆さん！ありがとうございます！これからも  
どうぞよろしく！

フフ。この時を待っていたぞ！！by作者（前書き）

二つに分けて『静雄VSフウ』をお送りします。

フフ。この時を待っていたぞ！！by作者

「私のこと忘れるとはいい度胸じゃねーか……………」

静雄とメウの背後から、メウの肩を掴むフウ。（静雄は、背が高い  
& 怖いから、掴まなかった。）

「…………いや、別にLV5にそんなこと言われても…………」  
メウ、あんまり挑発すんなよ？一応、忍者とかそこら辺の職業は魔法使いの天敵だからな。

「ふえ？そなの？」

ああ。たとえば100Mを3秒台で走るやつがいるとしよう。そいつが全力疾走しているところにテニスボールくらいの大きさのボールを当てられるか？

「たとえがアレだけど、無理だろうね」

そーゆーこった。すばしっこい忍者に『ファイヤ』しか魔法を覚えてないお前が魔法を当てられるわけねーだろ。

「あ、つまり、魔法使いが忍者に魔法を当てるには、馬鹿でかい魔法を使うか、大人数でいつせいに魔法を使えば当てられるけど、私は大きな魔法は使えないし、魔法使いも一人しかいないから忍者に魔法を当てるのはほぼ不可能に近いってことか」

正解。100点だ。よし、景品に『静雄と一回ガチバトル券』をあげよう。

「いらねーよ。間違いなく死ぬから」

チツ。んだよ。きつとキレーな花が咲くぞ。

（こわー！！）メウ

お、始まる見てーだぞ。

「フウの戦い方か……………そういやフウはまだ本気を出したこと無いとか言ってたな……………たぶん嘘だけど」

そして、静雄VSフウの戦いが始まった……

先に動いたのはフウ。腰のポシエットから短刀をいくつか取り出し、空中に投げる。

「LV5最大忍法、『刃の舞』!!!」

空中に投げた短刀は静雄の方へ刃をむけ、フウの周りで停止する。

「あんなんありかよ……」

メウがなしたろ!!!という顔をして言う。

「……」

静雄は無言だ。

「……ん？短刀だったら魔法で溶かせばいいんじゃない……？『ファイヤ』!!!」

メウが放った炎は周りに浮いている短刀の一本に飛んでいく……

……が、短刀は炎を切り裂いた。

「うわ……マジかよ……」

炎を切り裂いた短刀は、傷一つ付いていない。あ、いや、どこも溶けてない。のほろが正しいか。

ところでメウ。お前邪魔じゃね？

「邪魔……だね。安全なところでおとなしく観戦してるわ」  
そうしとけ。

……ん、今静雄の気持ちがあった。

(殺殺殺殺殺殺殺殺殺……)  
見なきゃよかった。

そして、フウから一言、

「レア職業『忍者暗殺科』フウ、参る」

忍者暗殺科……だと……!!

「……なにそれ？」

は？知らんの？バカ？

「死ぬ。……あれ？このくだり……どこかで……」

詳しくは第二話辺りを見るといいぞ。

「で、なんだよ『忍者暗殺科』って」

「忍者暗殺科とは」

このゲームのログイン300人目のみに現れるレア職業。身体能力値が普通の忍者とは比べ物にならないほど高く、隠密性に優れている。暗殺スキルというものを持ち、忍術も多種多様の職業だ。

「だからLV5でもあんなに強かったのか……」

ああ。ちなみに静雄の職業もレアだぞ。

ログイン1番目のみに現れる『アニメキャラ』の職業だ。

「ああくだから『平和島 静雄』……」

ん、そうゆうこった。

では、今回は『静雄VSフウ』をやるぞ。心して待つがよい。

フフ。この時を待っていたぞ！！by作者（後書き）

くちよつと小話

静：作者ア！！

作：うおー！！静雄！？どうしたんだ？

静：どうしたもこうしたもねえ！！テメ何勝手に別の小説書いてやがんだよ！

作：いや〜・・・つい書きたくなつて。

静：俺らの小説の投稿が遅くなんだろぅが！！

作：へ？そんなこと静雄気にしてたの！？

静：うるせえ！！！！

作：ん？何？どした？むきになつちゃダメだぞ静雄。

グサア

メ：天の声ー！！

フ：いや、なんで天の声に刺すんだよ。標識。

静：ア。？こいつ作者じゃなかったのか？

フ：ちげーよ！！こいつは天の声！！作者は体が無いって6話で言

つてただろ！！

静：知るか！！

（数分後（これ以上やると静雄のキャラが崩れる可能性あり））

メ：ああ……見るも無残な……

天：メウの周りにはフウの死体（すぐ回復するがな）が転がっていた。

メ：あ、天の声。大丈夫？

天：ああ。もう大丈夫だ。それより早くしめをつける。長い。

メ：ん。わかった。

天&メ：かなり無理やり感がありますが、こんな駄作を読んできている皆様に最大の感謝を。ありがとうございます！！

静雄VSフウ（前書き）

今回は初のちゃんとした戦闘シーンを書きます!!  
初なのであまり期待しないでくださいね？



## 静雄VSフウ

「静雄、覚悟!!」

フウはそう言って、短刀を静雄へ数本投げつける(?)が、静雄は標識ではじき、フウに向かって走っていき、

「死ねえええええええ!!」

と、言いながらフウのことを殴ろう(標識で)と横に振る。

「甘い!!」

フウはその標識を前方に向かって飛ぶ(静雄の頭の上を飛び越える感じの)ジャンプで避ける。

それに静雄はフウを叩き落とすように標識を上を振る。

しかしフウはその標識を踏み台にし、さらに跳躍。天井に頭をぶつけ、軽い脳震とう的なものを起こしつつ、受身をとって着地。静雄に短刀を飛ばす。

もちろん静雄ははじくが、フウは『かかった!』というように一瞬笑う。

「包囲完了!!」

いつのまにか静雄の周りは短刀で包囲(?)されていた。

(だけど甘いね。包囲するなら首にしないと。あれじゃ前方部分だけはいいたらあっさりぬけられるのがおちでしょ。byメウ)

メウの思っている通りだな。今静雄の周りにある短刀は静雄の体から30cmは離れている。ぬけるのはようだ。

「これで終わりだー!!」

フウがとどめというように短刀が静雄に向かって飛ぶ。

それとココで少し補足。ここで終わるのは静雄の命ではなくフウ。お前の命だ。

「チツ」

静雄は舌打ちをしながら前方の短刀だけをはじき、あっさりと包囲網から抜け出す。

「な………!!」

アホが。そんなことで驚いてたら死ぬぞ?………ま、いいか。一度死んだほうがフウのためにもなる。この世界では死は無いんだから。

(おい天の声。そんなん読者はきずいてると思うぞ?この世界はゲームの世界なんだから。死ぬことは死ぬが、復活できる。なんてゲームの基本だ。byメウ)

おいメウ。なぜせつかく立てたフラグを壊す。いいじゃないかこれくらいの夢を持っても。

おつ……。静雄がフウのことを殺しにくみてーだぞ。

(よし。じゃあ読者にもわかるように描写よろしく。byメウ) OK。えーと、

静雄は包囲網から抜け出した後、フウに向かって一直線に走っている。

「手前は……俺に暴力振るいやがって!何様のつもりだ!ア! ?神か?神気取りかお前は!ア?」

「ひう!!」

キレた静雄にフウは完全におびえきっている。

「死ねええええ!!」

静雄が両手に持っているのは……………

自動販売機だった。

グチャリ

静雄の怪力+自動販売機の重さでフウは人が発してはいけないような音を出して散っていった(命が)

(ゲツロー…………… byメウ&天の声)

「たつく……………元に戻れないじゃねーか」

は？元にな？どゆこと？

「さつきいただろ？金髪の浴衣をきた……………」

「ああ、うん居たね」

「あれ、俺だ」

「……………は？」

え……………！！あれオメー  
かよ！！女にしか見えな

「殺スゾ？」

申し訳ありませんでした。(土下座)

「ハ、ハハハハ……………」

殺気はんばない静雄に対して苦笑いをしているメウ。

「とゆーか私は主人公なのにまた忘れられてるのか……………」  
「……………」

フウがいつの間にか復活していて、悲しそうに体育座りをメウの後ろでしていた。

「……………ハハハ、べ、ベツニワスレテナンテイマセンヨー？」

「白々しいぞメウ!!」

(たつく騒々しい……) by 静雄

「それと静雄！リベンジしてやる!!」

グサ グサ

静雄の両足にボールペンが刺さっていた。

「……いや、なんでボールペン？」

## 静雄VSフウ（後書き）

くちよつと小話

作：フウが最近影が若干薄いきが……。主人公（仮）なのに・

フ：（仮）なんてつけんじゃねえ！！

作：いや、だって実際そうじゃん。ある種パーティーメンバーは皆主人公だよな。

フ：え！そうだったの！？

作：知らなかったのかよ……。

メ：にしても、この作品の静雄のキャラが若干崩れてない？

作：あ、やっぱり気が付く？そこ。

メ：だからやめといたほうがよかつたんだよ。作者だし。

作：どつという意味だよ！！それ！！

メ：聞いたまんまの意味です

作：くつそ。メウを小説内で残酷な死に方をさせてやる……

メ：え、ちよつ！それだけはかんべん！！

作：フフ。私を怒らせたことに後悔するが良い……………。

フ：（うつわー。悪役っぽー……………）

作：ん？なんか言ったか？

フ：いや、別に

作：ん、そうか。よし、フウ。お前がしめをやれ。

フ：わかった。えーと、それじゃ……………

フ：こんな駄目作者が書いた小説ですが、どうぞこれからもよろしくおねがいします。それと、だれか感想をくださいー……………い！！

静……………るせーよ

静雄VSフウ 〽後編(?)〽 (前書き)

どーも。ちかさんの、消えない絆の、小説を書いています。(ノートに書いてるこの小説の元)

猿飛佐助です。よろしくお願いします。ちなみに、男です。誤解しないでほしいのは、「彼氏とか?」ということですよ。

静雄VSフウ楽しんでください。

静雄VSフウ（後編）(?)

「しまったー！ー！ー！一回死んだから武器ランク下がったんだった！！」

あー……。そーいや下がるんだっただけ。武器ランク。静雄と始めてあったときは、気絶状態だったから死ななかつたしな。

「??？」

静雄は1人『何でボールペンなんだよ。ア？』って顔をしていた。

「しよーがねーよ。フウ、武器屋行ってこい」

「……………わかった」

そいつって部屋を出て行くこととしたフウの頭を掴む静雄。

「テメエ。俺に攻撃しといて生かして返すと……………思ッタノカ？」

「チツ。逃げられなかったか……………」 K Y

「……………まあ、イザヤよりよっぽど気に入ったからな。これくらいで勘弁してやるっ！！（ゴス！）」

静雄はフウに頭突きをくりだした！フウに150のダメージ！フウのHPはレットゾーンに入った！フウは気絶した！



「ポケ ンかよー!!」

うるせーなあ。別にいいんだよ!

「別にいいけどさ……………」

まあメウは置いていて、だ。

静雄は両足に刺さっているボールペンを見つめ、一言。

「これ抜いたら血イでるよなあ……………。ばんそうこう買ってから抜こう……………いや……………瞬間接着剤のほうがいいか……………」

「イヤイヤイヤ馬鹿だろ!」

メウがつっこんだ。

「ばんそうこうか接着剤かってこいよ」

スタスタ……………(メウが部屋を出て行こうと、出口に歩く音)

え?買って来るの?マジでそれで血止まるとでも、思ってるの……………?  
?

「じゃあ、ボンドで……………」

……………一回、死んだらメウ。

「冗談だよ。別にそんなに止まるとは思っていないよ」

……………本当かよ……………。て、静ちゃ……………じゃなくて、静雄は?

「あれ?いねー。マジで買いに行ったんじゃ……………」

探してこい。

「イヤイヤ、ここおいここ・・・（ブチ）ここだつてつてんだろ」  
なぜか、静雄は標識をかまえている

「まあまあ落ち着け静雄。それとちょっとたのみごとがあるんだけ」  
「ど」

「ア？」

「（こわ！）・・・いやさ、うちのパーティに入ってくんない？」

「・・」  
「・・」

「静雄？静雄さん？」

「・・」  
「・・」

「え、もしかしてなんか怒ってる？」

「・・」  
「・・」

静雄VSフウ 〱後編(?)〱 (後書き)

またまた、猿飛佐助です。

いかでした？静雄VSフウ。今回は、俺が書きました。(後半)間  
違いが、あつたら、

すいません。

ちかさんに、かわります。

佐助ー。書くの遅 (バキメキゴキ) くないです。はい。

それで、少しお知らせと、感謝を。

まず、いつも感想を書いてくれている、『如月』さん。ありがとう  
ございます。

あなたはエンジンです。あ、いや、あなたの書く感想がエンジン？  
です。

意味不明ですみません。

それと、PV1679アクセス、ユニーク688人！

おめでとー！！

ありがとうー！！

とゆうわけです。はい。

読者の方々。こんな駄目作者と駄目アシスタント(佐助)ですが、  
どうぞよろしくです！！

ひどくない！？by 佐助

あと少しでシリアスな展開に入るんだ。え？ネタバレ？大丈夫。シリアスなのに

今回の話は半分ほど佐助が考えてくれました！。それに改良を加えたのは私ちかですが。  
ここに書くのも私ですがね！！

（前回までは）

静雄に負け、武器ランクが一つ下がったフウ。しかし無謀にも再び静雄に攻撃をしかける。・・・まあ負けたがな。  
勝った静雄にメウは自分達のパーティーに入らないかと聞く。

「・・」

入る」by 静雄

あと少してシリアスな展開に入るんだ。え？ネタバレ？大丈夫。シリアスなのに

「ごめん静雄。もう一回」

「入るつつつてんだよ！！二度も同じこと言わせんなー！！」

「……………なんで？」

「ア、ア？入って欲しくねえのか？ア？」

「い、いや、そうゆうわけではないけど……………（こえー……………

）」

「じゃあ別にいいだろうが！」

「え、あ、うん」　なんか釈然としない。

あきらめるメウ。おそらくこれは作者のてぬ　『あ、こんなところに拷問用の道具が』　きではないから安心しろ。

「天の声、文脈がおかしいぞ」

文脈？なにそれ美味しいの？

「え……………さあ……………」　メウ　苦手教科：主に全部

「失礼な！！高1までの知識なら持っている！！」

ん？つてことは現実世界と対して年齢変わらないんだな。この世界の設定だと、お前16だし。

「ん？そついや俺テーマらのことほとんどしらねえじゃねえか」  
人物紹介やってないしな。おい作者。いつやんだよ。

『この村から出たらじゃん？』

なぜ疑問符……………。

ま、とりあえずさつさとこの村から出たほうがいいんじゃないか？

作者も早くやりたみたいだしな。

「わかったよ……。まあ静雄も仲間になったし、特にこの村に用があったわけじゃないからな」

あ、そうなんだ。

「そうなんだよ」

ところでフウはまた空気になってんのか？

「あ……。そうだね。じゃ、起こすか。オラ！さっさと起きろ！！（げしげし）」

メウはフウのことを蹴りだした！！

「ん……。？ふああああ。ねっみ……。……で、なに？」

「寝てたのかよ！！」

「うん」

（戦闘で負けたというのに……。能天気な……。）  
「で、なに？」

「ん、ああ。静雄が仲間になったってのと、この村になんか用があるのかってこと」

「え……。と。あ、道具屋と武器屋に行きたい。回復ポーションと煙球と閃光弾尽きてるし。武器買いたいし」

「回復ポーションはテメーが使いすぎたんだろうが！！」

ナイスツツコミ。メウ&静雄。

「いいんだよそんなことは。それより早くいこー!!」

(うわー……なんかハリキリすぎなんだけど……)

ま、そんなことは置いといて、フウたちは道具屋に向かうのであった。

ちなみに道具屋は、

歩いて5分！走って4分！チャリで3分！車で1分・

いや、20秒！

の所にあるよ。

「「「早あ!!」」」

近いしな。で、何で行くの？徒歩？5時間ほどかかるけど。

「ちょっとまで、さっき5分だって言っただけか？」

「60倍にされてるし……」

上からメウ、フウね。

冗談だつて。ほら、さっさといけよ。

「テメーのせいなんだけどな……」

聞こえない。(。3)

「どんな顔文字だよそれ……」

どんなつていわれても耳をふさいでる顔文字だよ。

「みえねーし」



オリジナルだしな。

「そつすか」

で、道具屋についたけど何買うの？

「いつのまに……」

作者のご都合主義です

「そつすか」

「じゃあとりあえず、回復ポーションを5本ほどと、被魔短刀買うか」

フウは回復ポーションと短刀を持ってレジに並んだ。

「えーと、5本と1本で1750Gね。」

「えーと……いくらあつたつけ……」

フウが財布を取り出し、中身を確認する。フウのお財布の中には

1Gもはいつていなかった。

「ん？どうし……た……」

静雄が固まったままのフウを見て財布の中を覗き込む。

「テメー、金ねえのかよ!!」

「みたい……」

「みたいじゃねー!!どうすんだよ!!」

「えーと……。だ、だれかヘルプミー」

アホか……。

「馬鹿なんだろ」

ところでバカとアホって何がちがうの？

「え……さ、さあ？」

「チツ、しょうがねえな……。おら、これ使え」  
静雄がフウに渡したのは静雄の財布だった。

「ど、どうも。(あれ？静雄がやさしい。明日は氷河期かパソコンウイルスの嵐だな)」

「ん？なんか言ったか？」

「どうもって言ったけど？」

「その後だ」

「別になにも」

「そうか」

「ちなみに静雄はいくら持ってんの？」

「90000000Gぐらいだな」

「多！！」 メウ&フウ

「あ、メウいたんだ。今までずっと空気だったからいないのかと」

「さっきからずっといたわ！！」

「ア？そうだったのか？」

「な……。！静雄まで！」

「譲ちゃん……。750G……。…」

「あ……。…」 静雄

「忘れてたよ」 フウ

「影薄いなーおっちゃん」 メウ

(グサツ！グサツ！グサツ！) 道具屋のおじさん

道具屋のおじさんの精神に100×3のダメージ！

「もういいよ……。ただで……。ほら持つてきな……」

「おじさんの心は折れ、置いてある商品を全てただにしてしまった。」

「え………？本当にいいの………！」

「いいわけねーだろうが！！（ドゴォ！！）」

あーあ。フウのHP、また減ったよ………。！！つかもう死  
んでるし！！

とび蹴りで死ぬって！！雑魚だ！レア職業なクセに雑魚いやつがコ  
コにいる！！

「ふつかーっ！！」

「早ア！！」

「おいお前、武器がまたダサくなってんぞ」

「ふえ？」

フウの武器は古びていて、カビが生えたボールペンを持っていた。

「なんて汚らしい………」 近所のバ……いや、おばさ  
ん。

「………」

ド、ドンマイ、フウ。

……ん？て、それカビじゃねーよ！！ただのボールペンにつ  
いてる模様だよ！このババア！！

（（手前が最初にいったんだがな！！）（））

グサリ………。

またかと思ってるのか？読者ども！ああそうさ！まただよ！手前ら  
の想像通りだよこんちくしょー！！

フウがまた静雄に攻撃したんだよー！！

（天の声がくれた………） メウ

「再びの再びの再びの戦いだ！」

「おいおいフウさん………。（一個再びが多くないか？）」

「アッ！手前、何回やりゃあ気が済むんだよ！！こんどこそ本当に・・・殺スゾ？」

「すみませんでしたー！！」

静雄の後ろに般若を見たフウとなぜか私（天の声）が土下座・・・いや、DO GE ZAをした。

ん？なんか格好良くね！DO GE ZAって！

「（ブチッ）天の声・・・手前ふざけんなよ？・・・コ  
ロサレタイノカ？」

静雄の手には電柱が握られていた。

ブン！

「え、ちょ、ま・・・」

ドゴーーーーーーン！！

フウの体に電柱HET！ちなみに私（天の声）はココにはいないから難を逃れた。（笑）

「フウ・・・大丈夫か・・・？」

「天の声！！いつか絶対殺してやるー！！」

ふ、やれるならやってっみるがいい。

つかお前死ななかつたのかよ。とび蹴りで死んだくせに。

「そこらへんは気合だ！」

「ラオンかよー！！」

メウのツツコミは伏字が多いと思うんだが・・・どうですか現場のフウアナ？

「右に同じくです。何も言うことがございません。というわけで中継役の静雄アナはどうですか？」

「……？フウ。お前の右隣には誰もいねーぞ？」

「あれ？これってそうゆう意味だったけ？一般人Aのメウさん」

「私はそんな立ち居地か！」

「似合ってるよ。すれ違った人Aの役」

「それはランクが上がったのか？下がったのか？」

「下がったんだよ。引きこもり君A」

「さらに下がった！？」

「腐女子Aがよかつたのか？」

「私は腐女子じゃねー！！（ガシ！ブン！！）」

メウはフウの腕を掴むとぶん投げた。

「あーれー（棒読み）」

あと少してシリアスな展開に入るんだ。え？ネタバレ？大丈夫。シリアスなのに

〔謝罪〕

変な所で終わってしまいました。反省はしています。ただし！後悔はしていない！（1回言ってみたかった）

誰かか毎回何処かで空気なこと。

今回はめっちゃくちゃ長いこと。

以上です。

〔キャラから一言〕

フ：諸君！作者は感想がこなくて死にそうになっている！誰かからの感想を頼む！

フ：ちなみに佐助、如月、静雄の三人は大体同一人物だ。覚えておけよ！

そのうち番外編あたりで明かされると思うがな。

フ：では諸君。また次回会おう！！

メウのLVがあがったよ！でもやっぱりこの小説はコメディーなんだね！（前書

はいどーも佐助です！

今回の小説の元は俺が書きましたー！

………てか、

さっさとクゴジ村の話をおわらせるよー………！！………このボケ作者が………！！

ちか

さ、さーせん。

でもね、ここまで長くさせたのは佐助じゃ………うん！  
めん。睨まないで。私が悪かったです（土下座）

天の声

「わー。ちかメツチャ弱いねー」

ちか

「うるさいやい」

「まあとりあえずココで長くなるのもあれなんで第11話をどうぞ  
」！」

メウのLVがあがったよ！でもやっぱりこの小説はコメディーなんだね！

「お、おいメウさん？い、今フウのこと……」

「えっなに？（にっにり）」

「い、いや……」

「じゃ、フウのこと探しに行かないとね」

いや、お前が今投げ

「て・ん・の・こ・え？（ニコオオオオオオ）」

てませんね。はい。大変申し訳ございませんでした。（土下座）

<何ん——時間ん——もたつた

ころ>

「フウーいねーのー？」

はい、ノートに書いてある原作（？）つか元？ま、とりあえずそれよりも若干口が悪くなっているメウさんです。

「ん？なにこの瓦礫の山」

作者のご都合主義ですね。ちょうどメウが目を向けた瞬間に中から手が出てきました。

「ア？この手、フウのか？」

「さあ？助けてみる？」

「助けるんだったらテメーが助けるよ」

「なんで？」

「だってアイツのこと見るとなんか殺したくなるから」

「さいですか」



訳：そうですね

とまあそんなこと言いながらスタスタと歩き去っていく2人。  
まー埋まっつてようと関係ねーぜつてことですね。  
一応リーダーなのに……………

まあ埋まっつてたのは通りすがりの不幸な少年A（プレイヤーキャラクター）だけどね。  
ちなみにフウがいるところは村の出口付近です！  
メウたちの所から遠いんだよ？（や、まじで）

「なあ静雄おー」

「なんだ？」

「武器屋いかね？そろそろLV上がるからさ」

「ああ、そっぴやお前LV10だったな」

「……………（ズーン）」

「プライド傷つけちゃったか？悪い」

「いや……………」

「はあ……………。ホレ、これやるよ！（ポイ）」

「（パシ）何これ？」

「LVが10上がる、ご都合主義のアイテムだ」

「……………さ、サンキュー（苦笑い）」

「おう」

テツテレットツッテター！メウのLVが10上がった！

メウの身長が3cm伸びた！

攻撃力が10上がった……………

かもしれない！

防御力が2上がった！

MPが100増えた！

HPが350増えた!

残酷さが10000000000

00増えた!

「うおおおおおおおおおい!!!!!!」

何だよ『かもしれない』って!上げるよ!攻撃力!

それと残酷さ増えすぎだろオ!!何があつたんだよ私に!!」

え.....さあ?

「もつと責任を持って!アノウンス!」

まあまあ落ち着けメウ。これで武器屋でもいい武器が見つかるんだし。いいじゃねえか。

「そっか」

とゆー訳で武器屋に到着!!その間は省く!

「いらつしやーい」武器屋のババア

「何にしようかなー魔法」

「お前そーいや\*ホルダー系だったな」

「うん」

「じょーちゃんあんた!ホルダー系なの!」

(クソババア息クセーよ)

「じゃあこつちにいい魔法があるよ!」

「そなの!」

「そうだよ。さあこつちおいで!そこのあんた(静雄)も!」

「は?俺も?」

「わーいっぱいあるー」

静雄はスルーされたのであった。

ちなみに今メウが所有する魔法は『ファイヤ』しかない。メウは後9個、今は覚えることが出来る。

「これいくら?」

「10Gだよ」

(安!) 静雄

<30分後>

静雄はイライラしていた。メウが30分間ずーーとどれにするか迷っているせいだ。

「んーじゃあ『ウォーター』と『アイス』と『ウンディ』と『キャッチ』と『ジャスタウェイ爆弾』と『バブル』と『弾丸&銃』と『スタンガン』と『カクセイザイ』でいいや!」

「はい、90Gね!」

「後ろの3つ恐ろしいな……。どれも法律で禁じられてんだけど……」

そんなことはメウには聞こえていなかった……。

メウのLVがあがったよ！でもやっぱりこの小説はコメディーなんだね！（後書

\*ホルダー系…。何かをけいたい（？）する人のこと？

ちよ、佐助、これなんて読むんだよ。走り書きでよめねーよ。

登場人物紹介はもう少し待て！！

（お知らせ）

佐助の書いた小説、『この世界』を投稿しました！いい話だと思っ  
ので見てやってください！（や、まじで）

感想をくれー！！！！！！

静雄の過去 前編（前書き）

さて、今回はかなり前のサブタイトルで予告した通り、今回はシリ  
アス……だと思えます。いや、だといいなさずね。  
ま、おそらくシリアスでしょう。

それと佐助。1つ謝罪。

元よりも長くなりそうです

## 静雄の過去 前編

買い物を通済し、ホクホク顔のメウと、ブチ切れ寸前の静雄が横に並んで歩いていく。

「……わー。めっちゃシユール。」

「ねえ静雄」

「ア？」

「ほんとだね、この後静雄が銃で撃たれてそれを私が宿に運んで……っていう静雄との距離を縮めるイベントがあったんだよ」

「……（作者死ね）」

「んで、そのイベントがカットされたんで、その後の静雄の過去の話へ話の移り方が元からかなり無理やりだったのに、前の話が無いのになんてやって静雄の過去の話にするかってさっき相談があったんだよね。で、どうする静雄？」

「んなもんなくていいじゃねーか？別に題名でシリアスなのにギャグって言うつまんだせいなだけだろ？アイデアが無いからってこつちに聞いてくんじゃねーよ」

まあそういうなよ静雄。作者だつてきつと静雄はメウと仲良くなるのがいやだろうと思つての配慮だろしな。

「……わかつたよ」

「そこわかつていいの！？今さらりと私のことが嫌いだって言われたんだよ！？」

「いや、テメーのことは別に認めたくなくてもないかな」

「ぐは！！」

メウの精神に1000のダメージ！

………どーでもいいよそんなん。

『おい、テメーら。なかなか決まんねーから作者権限で勝手に決めさしてもらってもいいのか?』

あ、作者。そーいや相談してたんだっただな。どうやって静雄の過去編に行くか。

『忘れてたんかい。まー別にいいや。もう決まったしな。』

とゆうわけで、回想ス

タート!』

ホワンホワンホワーン

(回想スタート音)

5年前 1月1日 PM 3:00

いきなり消火器がしゃべった。

「あんたならこの瓦礫をどかせるか?」

そう消火器がしゃべった。しかし瓦礫など何処にも無い。

「?」

静雄は不思議に思って、イラつきながらも話を聞いた。しかし静雄は話をほとんど聞いていなかった。

聞き終わった後に覚えていたのは“瓦礫”という言葉だけ。

なんでそんなに話を聞いていなかったのかというと、静雄は腹がへっていたから。ただそれだけだ。

しかし、静雄はあのときちゃんと話を聞かなかったことを次の日に後悔する。

それからというもの、消火器は毎日静雄のことを追ってきた。

静雄はただ、

静かに暮らしたいだけなのに。

平和に暮らしたいだけ

なのに。

このゲームはこの中にいくらいても外に出ると1時間しかたっていないといういろいろ次元を無視したゲームなのだ。だから、この中で静かに生きようと静雄は思った。

ココならば、現実の残酷な運命も届かないだろうと。

しか

し、

その願いをかなえること

は、GMゲームマスターがゆるさない

静雄のような考えを持つ者はそれこそ掃いて捨てるほどいるだろう。そんな人たちがこの世界にずっといたら、いつかこの世界がパンクしてしまう。

だから、その願いを持つ者ほど、色々な厄介ごとに出会わせ、このゲームをクリアさせてしまうのだ。

つまり、しゃべる消火器に出会ったことも、フウたちに出会い、一緒に旅をしていることも、

全て、GMゲームマスターの手のひらの

上………

そして、ある消火器が言った。

「我々の村へ来てくれないか？」

と。



## 静雄の過去 前編（後書き）

短い！！めっさ短い！！なんで！？書いてるときは長く感じたのに！  
読者の皆さん。こんな駄目作者ですみません……………。

さて、どうでしたか？一応シリアスにしたつもりなんですけど……………。

次の後編でもシリアスになるかと思えます。

さてさて、そろそろクゴジ村から出るのですが、ここでアンケート  
をとりたいと思います！

『クゴジ村から出たら、番外編をやるうと思っていきます。なにかア  
イディアがありましたら感想の一言に書いていただけると幸いです。

』

これをきに、感想を書いていただけるといいんですが……………。  
(さすがに友達からしか感想がこないときみしい……………)

静雄の過去 後編 〱クゴジ村編 最終話〱(前書き)

さあやってきました『静雄の過去 後編』!!  
前回は短くてすみません……。  
今回も短くなってしまうたかもしれないです。

ホントすみません!

〱前回までは〱

静雄の過去を作者に強制的に見せることに!

静雄の過去は消火器村での出来事だった!!

しかし消火器村は

「我々の村へ来てくれないか?」

3月6日 <消火器村>

「んで、何をしろって？」

消火器は瓦礫としか言わない。

「……瓦礫ってなんだよ」

瓦礫は瓦礫としか答えない。

「瓦礫は所詮瓦礫って事か？」

……

消火器は答えない。

「瓦礫とはどうゆう意味か。」

その瓦礫とやらはどこにあるのか。

しばらく歩くと、瓦礫の正体分かった。  
それは

消火器の山だった。

「これをどかせって？」

……コクリ

うなずいた。

静雄は消火器をどかし始めた。

全てどかし終わり、これで終わるはずだった。

・・・普通は。

静雄がどかした消火器が急に暴走した。  
周りのものを全て破壊し、家族に、友人に仲間に殺されていく。  
最後に残った消火器は……………

自殺し

た。

静雄は、彼らの争いを止めなかった。

静雄には、いや、その村の住人ではない者はその争いを止める権利も資格も筋合いもないから。

(俺は、何しにこの世界へ来たのだろうか？ココは平和だと、勝手に思い描いて。

運命はこんな場所にまで着いてくるのだろうか？

俺は……………逃げられないのか？

……………いや、もう決意したはずだ。俺は )

: :

「……………なんかすごいね」

「確かにすごいよね。まさか静雄にこんな過去があったとはね」

「うん確か……………ってええええ!!」

「よっ」

フウ、お前いつの間に……………。

「“ホワンホワンホワァン”って辺りから」

「静雄の過去の最初の方からじゃん！気付かなかったよ！？」

「気配を消すのは忍者の得意技だからね！」

「いや、テメーはただ単に影が薄いだけだろ」

「薄くない！！」

「ハッ！どうだか」

「くううう。……。まあそれにしても、まさか静雄にあんな過去がねえ〜（にやにや）」

「いや、今の嘘だから」

「ふえ！？嘘！？だましたな静雄！！」 フウ

「そんなこと作者に言え！俺はなんも言っただけよー！！」

その後も、ギアアギアアと言い争いを始める静雄とフウ。

しかしメウは、静雄の眼にほんの少しだけだが、悲しみの色があることがわかっていた。

あながち今見た過去は嘘じゃないんじゃないの？

たとえ事実と少し違っていても、きっとあの過去は本当にあつて、静雄も傷ついているんじゃないかなって……………

ちよっと思ってみたり……………ね。

さて、そろそろクゴジ村を出ることになる。また、新たな出会いがあるかもしれない。  
それでも、きつとこのパーティーから、笑いと、静雄の怒りの叫びは途絶えないんだろう。

なにがあっても・・・

「んで、次はどこに行くんだ？」

「んー・・・キャラメル村に行こうかなって思ってるけど」

「キャラメル村に・・・？」

「キャラメル村は行かないほうがいいんじゃないか？」

「いいじゃん別に。また誰かにあってパーティーメンバーが増えるかもしれないし」

「増えんのか？こんなグダグダのパーティーにメンバーが」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・増えるよ

！・・・・・・・・・・たぶん」

「なんだよ今の間！それとたぶんって、オイ！！」

「とりあえず行くぞ！キャラメル村に！！」

「はいはい」

「はいは一回！！」

「「テメーに言われたかねーよ！！」」

「ふああい」

クゴジ村の出口が見え、なぜか足が軽くなるフウ。

能天気なもんだ。

ずっと見られてるのも知らず、

ずっと監視されてることも知ら

ず、

自分

達の横を、彼女が通り過ぎたのも気づかずに。

「静雄は私が倒す」

フウと入れ違いにクゴジ村へ入って来た少女は、口にチュッパチャ  
ツプスをくわえたまま静かに告げた。

「キャラメル村で、待っている……」

彼女の言葉は風に溶けて誰にも聞こえなかった。

キュイイイインと、転移の魔法を発動させる少女。

「首を洗って待っている」

彼女が向かった先はキャラメル村。

決戦の日は……

近い。





ところであんた何しにきたんだよ。静雄に勝負を挑むなんて、自殺願者なのかよオメーは。

静雄の過去 後編 ㄱクゴジ村編 最終話ㄱ(後書き)

次回からは『キャラメル村』……かも。

……あ、いや、違うわ。次回は

ㄱ次回予告ㄱ

『登場人物紹介はできるだけ速くやった方がいいと思う』

フ：なぜわざわざ 見たいな感じに書いたんだか……。

**登場人物紹介は早めにやった方がいいと思う b yメウ（前書き）**

読者の皆様！長らくお待ちいたしました！

ついに登場人物紹介です！ここまで待ってくれてありがとうございます！！  
ます！！

遅くなってすみませんでしたア！！

では、登場人物紹介+ です！！

## 登場人物紹介は早めにやった方がいいと思う byメウ

「さあついにやってきました」『ザ 登場人しようか』い パート1』  
遅すぎんだよこのダメ作者が」  
「フウ、そんなことは誰よりも一番作者が分かってるでしょ」  
「んな事はどーでもいいからさっさと始めんぞ」

<フウ>

名前：フウ 年齢：16歳 身長：165cm 体重：「言  
うかボケエー！」

職業：忍者暗殺科（レア）

容姿：銀髪のショートカット。前髪を長く伸ばして右目を隠してい  
る。さらに口と鼻は黒い布で隠されている。

頭には『忍』と書かれた鉢巻がまかれている。目の色は白に  
近い銀。

洋服は忍者が着ている服の肩から先がないバージョン。腕に  
は忍者がつけてる（？）アレ。

なぜか腹だし。

絵にした方が早い。

筋力：B 跳躍力：S 持久力：A

HP（現在）：200 MP（現在）：10 LV（現在）：5

攻撃力：95 防御力：80 回避率：50%

武器：被魔短刀・クナイ・閃光弾・煙玉・小さい日本刀（？）

<メウ>

名前：メウ 年齢：16歳 身長：163cm 体重：「二  
ツコオオオオオオ（殺気）」

職業：魔法使い

容姿：茶髪の髪を肩よりも少し上にまで伸ばしている。頭には帽子をかぶり、帽子の真ん中にはエメラルド。目の色は茶色

服はワンピース（白）。腰の辺りをベルトで止め、服の数箇所には羽のデザイン

持っている杖の先端部分には薄い水色の水晶に棘を生やしたところなるって感じのやつがついている。

これで殴ったら間違いなく痛い。  
そしてやっぱり絵にした方が早い。

筋力：B 跳躍力：C 持久力：B

HP（現在）：430 MP（現在）：250 LV（現在）：  
20

攻撃力：105 防御力：90 回避率：40%

武器：杖

魔法：ファイヤ・ウォーター・アイス・ウインディ・キャッチ・爆  
弾・バブルタウエイ

・魔法銃&魔弾・スタンガン・カクセイザイ

< 静雄 >

名前：静雄      年齢：20歳      身長：約2m      体重：「しるか」

職業：アニメキャラ（レア）

容姿：見たまんま静雄。服もバーテン服。ただし、サングラスはかけていない。

筋力：S      跳躍力：S      持久力：S

HP：9999      MP：9999      LV（現在）：100

攻撃力：100000      防御力：100000      回避率：90%

武器：身近にあるもの（主に標識・ポスト・自動販売機）

能力（？）：静雄の怒り具合によりLVが変化。それにもない容姿もたまに変化。

変化？：オリキャラ（クゴジ村にて少しだけ登場）。

浴衣を着た金髪の男。

元ネタは『執事』の“ア○ダー・テ○カ”

だそうな。

あと女顔。

変化？：佐藤 潤。なんかのアニメキャラクターらし

い。(佐助情報)

ちなみに声優さんは『小野 ○輪』さん(静雄の声優)らしい。(佐助情報)

以上!

「今まで出てきたキャラクターはこれで全部だよな」 静雄

「いや、まだ佐助とちかと天の声はまだやってないよ」 メウ

それは別にいいだろう。聞きたい人もいないだろうしな。

「あ、天の声。この話では出でこないのかと思った」 フウ

出てくるわ阿呆ウ!!

……ってこんなことしてる場合じゃなかった。次は+の方いくぞ!

「はいはい………」

<パーティー内上下関係>

上 静 フ メ 下

<パーティー内強さ表>

静雄 > > (絶対的に越えられない壁) > > フウ メウ

<レア職業能力説明>

忍者暗殺科：普通の忍者よりも身体能力値が高く、隠密性に優れている。暗殺スキルというもの

を持ち、忍術も多種多様

レア度：E

アニメキャラ：好きなアニメキャラになることができる。また、身体能力値がとて高い。戦闘方法

はそのキャラによって様々。

レア度：S

<フウとメウの共通点>

方向音痴。普通なら1日でいけるところを短くて1週間。長くて2ヶ月もかかる。



<このゲームの簡単な説明>

名前：剣と魔法の勇者達      ラスポス：魔王      中ボス：4体  
難易度：低い

すごいところ：ゲームの中へ入ることができる。

外へ出てくると、どんなに長い間ゲームの中において  
も1時間しかたっていない。

キャラや職業がとても豊富。

ゲームが故障すると、自動的にログアウト。そのため  
故障しても植物状態にならない。

悪いところ：どんなにやっても1時間しかたたないことずっと中  
にいる人が増加。

そのため、クリアをすると強制的にログアウトするよ  
うになっている。

あと、このゲームの中に一年以上いると強制ログアウト。  
ト。

（静雄はちよくちよくログアウトしながら入り浸って  
る）

「こんなんでいいだろ」 静雄

「おー。意外とすごいんだなこのゲーム」 フウ

「確かにな・・・」 メウ

まあ確かにすごいわな。

それでは、また次回会おう！

登場人物紹介は早めにやった方がいいと思う byメウ（後書き）

とゆー訳で登場人物紹介でした！！

今回は番外編をやることにします。

アンケートはまだ募集中です。

また、そのほかに感想や誤字・脱字報告も待っていますよ！！

それと、ここまで読んでくれた読者の皆様に感謝を！！

ありがとうございました！！！！

『本音バレバレ機』 (ド〇えも〇の声で) (前書き)

はは・・・・・・・・・・・・・・・・駄作だ・・・・・・・・。

『本音バレバレ機』(ド〇えも〇の声で)

「さて、とうとう番外編になったのだが……」 フウ

「いま、私達はある意味魔王よりも大変な敵に直面している!!」  
メウ

「それは……」

「『番外編でやる事が無い!!』」

「……そうだろーと思ったよ。アンケートをとったけど全く返答なし。それどころか誤字・脱字報告すらきやしねー。」

「もうここに投稿してる意味あんのか? ってぐらいだから……」  
・ 静雄

作1『うるせーよ。いいんだよどうせこの小説は私が趣味で書いたものだからな。人気が無くて当然だ』

そこまで言っちゃう? 普段うざったくなるほどポジティブなあなたが。

作1『お前に言われると軽くイラッとくるわ。』

どーゆー意味だよ。

作1『教えない』

「……でも別に考えてなかったわけじゃないんだろう?」  
番外編のテーマ。

「おお！なんか天の声が大人（？）だ！！」

ここで行数をかけて佐助に怒られたくは無いからな！

「前言撤回。やっぱり天の声は天の声だったわ」

「だな」

いいんだよ。

で、テーマは何だよ番外編の。

作1『これをお前らに渡したら面白そうだと思ったから番外編にしたんだよ』

おお！！これは………なに？

「そうだろうと思ったよ」

「いい加減飽きたよそのボケ」

このボケやったっけ？

「作者の記憶力が普通の人の0.1しかない脳によればな」

「あてになんねーな オイ！！」

作1『0.1じゃねーし！！少なくとも0.5ぐらいはあるわ！！』

「どっちにしるあてになんねーよ！！！！」 「フウ&メウ&

静雄

作1『それはともかくコレだ。この『本音バレバレ機』（ド〇えも〇の声で）があればきつと面白くなるぞ』

漢字一文字で表すと『失』のお前が？

作1『それは今どうでもいい』

さいですか。

「本音バレバレ機？どう見ても盗聴器にしか見えん」 フウ

「見たことあんの？盗聴器」 メウ

「いや、私の想像的には」

「お前も結構あてになんねーな」

「ゲハア！！」

「リアクションが1パターンしかねーぞフウ」

「しょうがないんだよ。作者がこれ以外のリアクションを思いつかな  
な」

「……なんで本題に入る前にこんなに行数を使うんだよ……」

「アイツらの戯言なんざ置いといていいだろ別に。で、これどうやって使うんだよ」

作1『その機械をそのバーテン服のポケットに入れるか、襟につけるかしてとりあえず装備してる状態にしてみる』

「……こうか？」

静雄はバーテン服の襟の裏へ『本音バレ』（略した）をつける。

作1『うんそうそう。それじゃ、私はもう帰るから』

作者はそういうとキュウウウウンと転移をしていった。

で、どうすんだこれから？

「『っーかこの“本音バレバレ機”って名前そのまんまじゃなーか』  
……ア？」

静雄が何か言おうと口を開いたところで静雄の声と似ているが、どこか機械じみている声が聞こえた。

「どうゆうことだ？」 静雄

「ん？なーに？今の声。静雄に似てたけどちがうよね」 フウ

「ああ。『ツチ。うるせーのが来たな。もうこいつら死ねばいいのに……いや、もういつそ俺が殺すか？……殺そう。殺す殺す殺す殺すクロスクロスクロスクロスクロス……』」

「静雄おめー怖えーよ!!!」

「別に俺はお前達を殺すなんて言っていないぞ?」言ってはな……  
」

……なるほど……。静雄。たぶんこの機械み  
たいな声言ってるのはお前の心の中だと思っぞ。

「な……マジかよ!!!」あの作者め……いつか殺す。  
いや、今殺す」

「いや、殺すなよ!!!」  
「殺さねーよ……」見つけたら殺すけどな」

「……メウ……私達はこんな危険人物とパー  
ティーを組んでたんだね」  
「だな……」

「おい天の声。この機械が反応しない様にするにはどうすりゃいい  
んだよ。『もういつそ壊すか?』」

ん……。あ、そっだ!!!瞑想するっていうのはどうだろう  
!!!

「瞑想か……」大丈夫なのかよ瞑想なんかで。つか  
瞑想って何だ?」  
知らないのかよ!

「うるせえよ!!!」テメエから殺すぞ!」テメエから殺すぞ!」  
「おお。おもってることと言ったことが一致したぞ!!!」  
「こっゆっこともあるんだな」





全員無言だった。

そして静雄は『本音バレ』を襟からはずし踏みつけて壊すと、静雄はメウの顔面にポストを投げつけながら、フウはメウの背中にドロップキックをしながら同時に言い放った。

「「そうゆうことはもっと早く言え!!」」

「へぶろは!!」 攻撃をくらったメウの声

つーか自分達でそれくらい気付けよ……。。。

END

『本音バレバレ機』(ド〇えも〇の声) (後書き)

はい、番外編でした。

どうでしたか？今回は佐助と番外編の話をしているときにふと思いついた話です。

感想・アドバイス・誤字脱字報告・アンケートは随時受付中です！

今回は番外編になるかもしれませんが、本編を進めるかもしれません。

↓次回予告↓

番外編・・・『静雄・フウ・メウの誕生秘話！？+』

本編・・・『迷路って言うのはだいたいトラップが仕掛けられている』

ではではまた次回！！

フ：オアデイス！！

メ：どうゆう意味？

フ：さあ？

メ：駄目じゃん

フウ、メウ、静雄の誕生秘話！ + (前書き)

投稿遅れてすみませんでした!!

## フウ、メウ、静雄の誕生秘話！+

とゆう訳で、今回は静雄・フウ・メウの誕生秘話を公開するという話だ。

「何がとゆう訳なのかはさっぱりだけど、どうせこの番外編も読者からの希望ではないんだろう？」 フウ

「だろうね。たぶん読者からの感想とかが無かったんだよ。この小説人気無いから」 メウ

そうゆうこと言うなよ……。事実だから余計心にグサリと刺さるだろう。作者の心に。

「また本編に入る前に話を長くするのか？ いいからとっとと始めやがれ」 静雄  
はいはい。

: :

<静雄の場合> (全て創作)

ちか「佐助佐助」。佐助は何のキャラにすんの？」

佐助「これ」

ちか「……………これ静雄じゃん」

佐助「別にいいだろ」

ちか「いいけどさ」

: :

とゆう訳で静雄が完成したんだ。

作1『嘘だけどね』

「「「嘘かよ!」「」」

作1『書いといたじゃん。(全て創作)って』

「「「まぎらわしいわ!」「」」

: :

< 静雄の場合 > (一部創作)

佐助「ほいこれ」

ちか「ん? ああキャラクターのやつか……って『ア○ダー・テ○カ』かよ!」

佐助「だめか? じゃあ書き直してくるわ……あ、ところでちか「ん?」

佐助「やっぱお前見るとイラつく(怒)」

ちか「……」

↓ 次の日 ↓

佐助「はい。書き直してきた」

ちか「ん……まあいいんじゃないか?」

佐助「なんか文句あんのかよ、ア?」

ちか「ないないない! だからその握力で手の骨をゴリゴリやらないでください!」

佐助「……(パッ)」

ちか(痛かった)

↓ 数日後 ↓

佐助「ちか、やっぱりキャラクター、静雄に変えるわ」

ちか「んな急に!!！」

佐助「別にまだキャラクターは出てないんだからいいだろう?」

ちか「別にいいけどさ……」

: :

という訳だ。

「なんつかさー」 フウ

「なんつーかねー」 メウ

「佐助って天邪鬼とゆうかなんというか……とりあえず  
キャラ変えすぎだろ」

本当はもう少し色々変えてたな。初期の名前は『ア○ダー・テ○カ』  
だったしな。

「まじかよ……」 静雄

: :

<フウの場合> (一部創作)

ちか「忍者キャラがいい!!それと片目は隠したい!!」

佐助「わーたよ。いいから黙れ。じゃないと……殺すよ?」

ちか「……!!」 (コクコク)

佐助「こんなんでいいか?」

ちか「うんいいよ。じゃあ次は服か……」

佐助「忍者ってだいたいこんな感じだろ(カキカキ)」

ちか「……だな」



メウ「なにやってんだ？」

ちか「お、いい所にきたメウ。忍者の服ってだいたいこんな感じだよね」

メウ「そうだけど……ちょっと貸して（ケシケシカリカリ）」

ちか「……………ちょっとメウさん？」

メウ「ん？」

ちか「なぜ腹だし？」

メウ「や、何となく」

ちか「……………そうかお前は変態か」

メウ「ちげーよ!!」

ちか「いや、いいんだ。人の趣味は人それぞれだからな。大丈夫私はそんなこと気にしないから。」

さて、

メウ今まで楽しかったよ。それじゃあ」

メウ「趣味じゃねーし!!っーか友達やめるき満々だなオイ!!」

ちか「えっ!!メウと私って友達だったの!？」

メウ「ヒデエ!!（泣）」

ちか「大丈夫。嘘だから。メウとはちゃんと友達だよ」

メウ「ちか……………」

ちか「まあ友達って言うてもケンカ友達だけどね!!」

メウ「な……………!!」(絶句)  
「ちか(メウをいじるのは楽しいな)」

↓数日後↓

佐助「で、結局どうなったんだよ服は」  
ちか「また変えんのめんどいし、このままでいくわ」  
佐助「わかった」

:  
:

「わりとまともに作られてるな」 静雄  
「だね。つーか忍者キャラがよかったのかよ」 メウ  
「作者は忍者が好きだからな。」

「え!?あの真つ黒の不法侵入常連犯が!」 メウ  
作1「ほう……………。メウ。お前は殺されたいらしいな……………」  
「……………」  
「げ……………」

作1「死ねえ!!来たれ炎の精!触れたものを焼き尽くせ!『火炎』」  
「!」  
「いやだ!!来たれ水の精!立ちほだかるものを押し流せ!『濁流』」  
「!」 メウ

ドゴーン!!

「おい静雄。なんかメウと作者が魔法の撃ち合い始めたぞ」  
「いいからほつとけ。おらとつと先に進める天の声」  
……………  
「おいよ。」

<メウの場合> (一部創作)

ちか「つーわけでメウのキャラなんだが……」

メウ「魔法使い！魔法使い！」

ちか「……そっすか」

メウ「んで服はこんな感じ…… (カキカキ)」

ちか「あ……うん。早くて助かるよ……」

メウ「だろ!!」

:  
:

「「「決まんのはやア!!」「」」

いや、そんなに早くはなかったぞ？つーかいまだにメウはキャラ製作中だしな。

「他に決めることあんのか？」 静雄

服をまだ決めてないんだよ。一応今は最初に決めた服にしてるがな。

「へー……つーかメウいつのまにこっちに来てたの？」 フウ

「私のが始まったからな、途中でやめて戻ってきた」

「そっすか」

「……あ、今ので最後か」

ああ。だがまだこの話は終わらないぜ！つづいてはこの人だ!!

<猿飛 佐助>

「佐助か」 静雄

「……本編に出てきたっけ？」 メウ

「まだだったと思うけど……」 フウ

いや、一応名前だけは出てきてるぞ。

「……あ、ホントだ」 フウ

「前書きと後書きだけだね」 メウ

そんなことは置いて佐助の紹介だ！

<佐助>

名前：猿飛 佐助      年齢：？      身長：？      体重：？

職業：忍者、作者2

容姿：とあるゲームにて登場する『猿飛 佐助』と同じ。つーか本人。この世界<sup>ゲーム</sup>にきて魔法が使えるようになった。（本人談のため信憑性0）

筋力：EX      跳躍力：EX      持久力：EX

HP：だいたい10000000000000000000くらい？（もっとある可能性有り）

MP：じゃん？      LV：じゃん？

攻撃力：1000000000（もっとある可能性有り）

防御力：100000000（もっとある可能性有り）

回避率：99.9999999999999999%（攻撃を当てる事が出来たらもはや奇跡）

武器：闇鳥（なんか巨大な手裏剣らしいぞ？）

魔法：書いてたらきりが無いので省略。ただし基本的には『世界<sup>ワールド</sup>』がつく魔法。

：

とまあこんな感じだ。

「「強すぎるでしょ（だろ）この人（こいつ）。どうやって（どうやって）倒せと（倒せと）倒せんだよ（？）」「」

ところでこの話もう終わりにしてもいい？これ以上やったら作者が死ぬからさ。

「かこの物語の作者、話があつちこつちにとびすぎなうえ、さらに戦闘描写が雑魚いってどうなのよ？終わってるよ？物語として。しかもキャラの性格が定まらないし、話もなかなか進まないし、更新不定期だし。この小説が人気になるわけないじゃん。もういっそこの物語の作者どっかで死ねよ。殺されるよ。」

他にもさあ

この後約1時間ほど天の声が愚痴っていたため大変不本意ながらここで切らせていただくことといたします。関係者、ならびに読者の皆様。大変申し訳ございませんでした。

フウ、メウ、静雄の誕生秘話！＋（後書き）

新事実発覚。番外編は意外と難しい。

さて、今回の番外編はどうでしたか？・・・面白く無かった？  
ですよ。とゆうか私が番外編とか無理なんだよこんちきしょう  
！！  
誰だよ番外編やろう！！って言ったやつ！・・・私ですね。は  
い。

は。とりあえず次回からは本編へ戻ります。いったいあの少女は  
なんなんだろうね？

く次回予告

『迷路にトラップはつきもの』

フ：300億年後ぐらいにまた会おうぜ！！

メ：それまでに地球が滅んでないといいね。

色々整理しないとダメだろこの小説b y f u (前書き)

やーちょっと色々整理しないとね。 H A H A H A H A H A



## 色々整理しないとダメだろこの小説byフウ

今回はフウ達の出番は無く、私、『天の声』だけでやらせてもらう。

### <魔法の説明>

・ファイヤ（下級魔法） バasketボールと同じくらいの大きさの火の塊が狙った方向へ、一直線に

飛んでいく。操ることはできない。

・ウォーター（下級魔法） ファイヤの水バージョン。

・アイス（下級魔法） ファイヤの氷バージョン。

・ウィンディ（下級魔法） ファイヤの風バージョン。

・キャッチ（下級魔法） 下級魔法なら、一回だけ吸収し、消滅させたり、吐き出したりできる。

・爆弾（下級魔法）<sup>ジャスタウェイ</sup> 爆弾を出現させ、投げることができる。

・バブル（下級魔法） 大量の泡が出現する。触ると爆発するが、威力は低い。

・魔法銃&魔弾（魔法具） 炎の属性が入った魔弾と、魔弾を撃ち出すための銃。

撃つとファイヤと同じくらいの大ささ

の火の塊が出る。

・スタンガン（魔法具） どこにでもあるスタンガン。ただし威力は持ち主が消費したMPによって変

わる。

・カクセイザイ（下級魔法） . . . . . まあ追々分かるだろう . . . . .

以上だ。

#### 作者紹介

ちか . . . . . 作者1。基本的に権限は作者1が持っている。なのに作者2に頭が上がらない様子。

佐助 . . . . . 作者2。執筆スピードは速いが、まったく話が繋がっていない。時折本編へ姿を現す。

#### 天の声

ちかの人格をそのままコピーして作られた。主にツツコミ担当。たまにボケ。

ふむ。こんなところか

ではまた会おう！

色々整理しないとダメだろこの小説b y f u (後書き)

とゆーわけで、ちょっとしたこととかを書いてみました。

こんな駄作をこの話まで読んでいてくれるあなたに最大の感謝を。

迷路にトラップはつきもの（前書き）

いや〜遅くなりました。

何を書くかは既にノートの方へ書いてあるのですが、いかんせんやる気が出ないのであります。

どうしたらいいんだろうなあ……。

では、『お菓子の国』編。スタートです。

## 迷路にトラップはつきもの

「キャラメル村って『お菓子の国』の中にある村の一つなんだよね」  
メウ

「ああ。いくには周りを囲むようにしてある『あめ村』を通らなきゃいけないんだが……」

「なんであめ村の中が迷路になってんだよー……！！」  
「！！」

フウの叫びであめ村にいた全ての鳥がいつせいに飛び立った。

「うっせーよ！！（ドゴォー！！）」

静雄とメウがフウにドロップキックをくらわした。

「ぐはっ！」

HPが少し減る。

「……なんで少しなんだよ……」

ちか『仲間だからな。威力が百分の一なんだよ……いや、もつとか』

「チッ」

「そこで舌打ちすんな！！」

フウの声を無視してとつと歩き出す静雄とメウ。

「ところで静雄。あんた方向音痴？」

「ア？ちげーよ」

「良かったー」

「……もしかしてオメーら……方向音痴なのか？」

「……（コクリ）」

「……」

「まさか『始まりの村』から『クゴジ村』まで1週間もかかるとは思わなかったよ」

「……………」半日で着いた人

「あんときはあせったよな」

「……………」(バカだろこいつら……………)

「と、いうわけで案内よろしく」

「……………」ハア」

タバコの煙をはきながら、溜め息をつく静雄。

「ほら、早くいこ」

「(カチン!)」

静雄はイライラしながらも、中に入っていくメウとフウの後を追った。

↓30分後↓

「あつれ〜?また入り口だ」

静雄はキレかけていた。

(あーくそ!やっぱこいつらに任せるんじゃない!)

始まりはあめ村の入り口でのこと。

フウとメウが本当に方向音痴なのか確かめるために

『まずテメーらが先頭やれ』

と静雄は言ったのだが……………

(こいつら……………同じ所しか通らねえ……………!)

フウとメウは入り口に戻ってきてしまいうルートをグルグルと回り続けつづけるのだ。

(ハア……………しゃーあねえー。俺がやるか)

「テメーら、もういい俺が先頭やる。後ろからついて来い」

「わかった……」  
2人は不満そうな顔をしたが、静雄にとってはどうでもいい。  
（だって方向音痴だろ？）  
確かにねー。

（20分後）

行き止まりに行っては分かれ道へと戻り別のルートに行く。  
といった事を繰り返し、地下1階まで行ったところで静雄はあるものを発見した。

周りの壁（レンガ造り）の一部が少し飛び出している。

（スイッチ……畏だな）

そう思い通り過ぎた静雄。だが……

「ん？何これ？」

フウが見つけてしまった。

静雄はフウがスイッチを押すのを止めようとして後ろを振り向くが  
とき既に遅し。

フウはもうスイッチを押していた。

カチリ  
……

「……」  
が、何も起こらない。

（んだよ……）

安堵して再び歩き出そうと静雄が前を向いた瞬間、間の前に天井が  
落ちてきた。

「……」



うわぁ・・・。足先0.5mmかよ・・・。静雄メツチャ危なかつたじゃん。

「ご、ごめん静雄」

フウが血の気の引いた顔で静雄に謝る。

「・・・・・・・・（ガシ）」

静雄は無言でフウに歩み寄り、ガシリとフウの頭を掴むと、

「死ね」

と一言いい、手に力を加えた。

グチャリ

と、頭蓋骨もろとも、脳が潰れる嫌な音がした。

そして、フウは死んだ。

「・・・・・・・・（ガクガクブルブル）」

メウはメチャクチャ震えている。

「さ、行くぞ」

静雄は何も無かつたかのように再び歩き出した。

メウはフウを運ぼうと思ったのだが、頭を持つのが嫌だったのか足の方を持った。

その時の振動でフウの右目にかかっていた髪が少しずれて、フウの隠れていた右目が少し見えた。

メウは好奇心に駆られてフウの足を下ろし、髪の毛をどかしてみた。だが、私が見ていた位置からはメウの表情も、フウの右目も、見る事ができなかった。

そのときメウが、笑っていたのか、

泣いていたのか、

怒っていたのか、

私

には分からなかった。

「……………」

メウは無言で再びフウの足を持ち、引きずりながら静雄の後を追った。

## 迷路にトラップはつきもの（後書き）

フラグが立ったぜ！！

でもしばらく回収する気はなし！

イエー！

……まあ遊びはこれくらいにしてですね。

こんな駄作を読んでくれる皆様に感謝です！

ありがとうございます！！

しかし感想つてこないものですね。

いまだに友達からしか来ない感想……（泣）

誰か感想をください！！

そうすればきつと更新速度も上がるでしょう。

くれなくてもあげる努力はしますが。

ではまた会いましょう！！

（次回予告）

生き返ったフウ。そしてメウ、静雄に再び襲い掛かるトラップの悲劇！！

最後まで生き残るのは誰だ！！

『お菓子の国』編 第2話 『人類共通の敵それは  
』

そして、アイツがついに牙を剥く ！！

人類共通の敵、それは (前書き)

皆様長らくお待たせいたしました。話が完成いたしましたので投稿させていただきます。

今回はいつもよりも長いかな？だといいな。

（前回までは）

キャラメル村へ向かう途中にある『あめ村』（迷路）にて、フウはトラップで静雄を殺しそうになる。

運良く難を逃れた静雄は憂さ晴らしにとフウのことを大変グロテスクな方法で殺すのであった……。

これ小説になってんだぞ？あんましグロイことはやらないで欲しいんだけど？

「死ね」 静雄

## 人類共通の敵、それは

「ふっかーっ……」

どうした？ テンション低いぞフウ。

「いやだって死ぬ直前に聞いた音があの音だよ？」

「あの音……ああ。この音が」

メウはカチッと3秒レコーダーのボタンを押すと……

<グチャリ>

「なんで録音してんだよ！！」

「や、なんとなく？」

「テメエ……」

「ほらほら、早くしないと静雄がご立腹だぞ？」

「く……」

しかたなく歩き出すフウ

「チツなんだよテメー生き返ったのかよ」

「な！ いま舌打ちしただろ！！」

「うっせーな。誰のせいで死に掛けたと思ってんだ？ アア？」

「私は死んだんだけど！？」

「もう一回やってやるーか？」

「いや、いいです……ごめんなさい」

(ところで天の声。さっき“見ていた位置”って言ってたけど、お前どっから見てんの？)

メウがフウと静雄の言い合いを見ながら小声で聞いてくる。

んで、メウからの質問の答えだが、私は作者が見ているものをモニ

ターを通して見て、その描写を言っただよ。これが天の声のカラーリだ。  
ちなみにだが、作者は体が無いからお前達には基本的には見えねーからな。

（へー。そうなんだ）

つかなんで小声？

（や、なんとなく？）

なぜ疑問符……。

「フウ、静雄！先に進もうぜ」

「ん」

「なんでオメーが命令してんだよ。方向音痴の癖によ」

「それは関係ねーだろうが！！」

「フウ。テメーはもうなんかあつてもへたに押したりすんじゃ

カチ

どこからかスイッチの音がした。

「フウ！テメーこんどは何しやがった！！」

「いや、今のは私じゃないんだけど……？」

「はあ？じゃあテメー以外に誰が」

ガコン

静雄の下の床が急に開き、静雄が落ちていった。

「………なんで静雄？」

作者………何がしたいんだオメーは。

「………あ！静雄！大丈夫！？」

メウが慌てて駆け寄る。

カチ カチ カチ

メウが踏んだ床からスイッチの音がし

ガコン グシャ ブシャアアアアア!

「……………」

フウとメウは顔を見合わせ、最初の“ガコン”で穴がしまった、静雄が中にいる穴を見る。

グシャ、とブシャアアアアア、は何かあったんだろうな……。

「し、静雄？」

フウはスイッチを踏まないように気おつけながら静雄が落ちた穴へ向かう。

ちなみにメウは通路の端でガクガクと震えている。

ちよいちよいメウさん？

「死にたくない死にたくないしにたくないしにたくないシニタクナイシニタクナイ……………」

……………私は何も聞かなかった。

ドッゴーーーーー！！

「ゲホッ ゴッホ オエッ」

「静雄!!!」

落とし穴を閉じていた蓋がぶち壊され、中から静雄が出てきた。

ちなみにゴッホとは『ひまわり』などを書いた有名な画家である……。たぶん。違ってたらすまん

「テメエ！何さらしとくろーんじゃボケエーーーーー!!!」



「ひい!!」

「メウ、手前のせいで死にそうになったじゃねえか!!」

「な、中で何があったんだ？静雄」

フウが恐る恐る聞く。

「めんどくせーから作者ア！」

ふいふい。んじゃ、

ホワンホワンホワワ〜ン

〜落とし穴の中〜

「チツ、んだよこの穴ア！」

穴はそれなりに深く、約2mの身長（デカ!）がある静雄が縦に3人ほど入る。

あ、ちなみに今静雄は穴を登っているところ。

1分後

静雄が半分ほど登ったところで穴が閉まった。

「あっ……」

中は暗くなった!

……当たり前だな。

「っーかくれーな。この穴の中……」

ヒュツと風を切る音がするが、静雄は気づいていない。

だって登るのに必死だったんだもん!当たり前でしょ!

グサア

大げさに聞こえるけど実際こんな音がしたんだからね!!



静雄は無言でガスマスクをつけると再び上を目指して登り始めた。

: :

と、ゆー訳ですね。はい。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「今更許されると思ってるのか？ア？」

「思っていないです！」

「分かってんだな？ならとつとと死ね」

ドス ガシ グチヨ

メウは目潰しをされた後、フウと同じく頭をつぶされて死んだ。静雄はメウの死体にさらに蹴りを加えているが。

にしても静雄のLVがはんばねえ……。LV90億とか……。いろいろな意味でアウトだ。

: :

「復活しましたけど何か？」

や、別に誰もなんも言ってないんだが？ってゆーか何そのどや顔。

「いや、なんかこう……。ノリでさ」

「ノリでどや顔されてたまりますか」

「や、でもさー。なんか復活したらなんか一言言わないといけないようないんきが……。こうな」

「どんなないんきだそれ」

おいおい。喋ってばっかだとまたスイッチ押しすぞ。

「………」  
んな急に黙らんでも………。そんなに怖いんかいな静雄が。

ビー！ビー！ビー！

「……！？」

あ……これは……赤外線センサーだな。なぜに赤外線……。

ガコン ドシヤアアアア！

天井が開き人類共通の敵が大量に落ちてくる。

「あ………うわ！」 静雄

「え……ぎゃあー！」 フウ

「こっちくんないー……！！」 メウ

静雄は近寄ってくるゴキブリを問答無用で殺虫剤（強力）をかけて撃退しつつ道を進んで行き、

フウは持ち前の俊足を生かして静雄とは逆の方向へととと逃げ、メウは魔法でバリアーを張り、いなくなるのを待つ。

3人はそれぞれ別の方向へ逃げていった。（1人はその場に留まっているが）

大丈夫かな？フウとメウは方向音痴だぞ？

人類共通の敵、それは (後書き)

はいはいダメ作者ことちかですよ。今回の話はどうでしたか？グロイシーンがあっただんで心配なんですけど……。でも大丈夫です！後の方になればグロイシーンではなく、会話で笑いが取れる話になる……。予定ですので。

次回の投稿はもしかしたら年が明けられるかもです。できるだけ年内に投稿できるようにしますが……。

ま、なにもともあれ。

こんな駄作を読んだけいただき、本当に本当にありがとうございます！！！！

感想も、ポイントも増えないけど、読んでくれる人がいるだけで私は幸せです！！

もう死んでも良い……。訳ねーだろ！！完結させてから死ぬわドアホ！！

……。あれ？じゃあ完結させたら死ぬのかな？それもそれですごくいいけど。

さてさて佐助。今回もれいによって若干展開が変わってるけど、大きくは変えてないからいいよね？

ダメだったら言うて。変えてもいい範囲で編集するから。

ではではまた今度〜〜

なんか迷路がトラウマになりそう……。。。。。。。b y f u (前書き)

死ぬほど遅れてすみませんでしたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

今回は下書きのノートには描かれていないところまで書いた、ほぼオリジナルの話だったので、色々悩んだのと……。。

友達に誘われて始めたゲームにすっかりはまってしまい、そのせいで遅れてしまいました。

ほんとに申し訳ありませんでしたア!!!!!!!!!!!!

今回の話で少し物語が動きます。

まあ、本格的に動き出すのはまだまだ先ですが。

では、ぶしゅ。



なんか迷路がトラウマになりそう……。b y f u

くフウ

「皆ー！ー！どー！ー！ー！ー！」

わんわん泣きながらトボトボと歩くフウさん。

「もう泣きたい！いや、もう泣いてるけどさー！」

静雄と逆の方向に逃げて、そのままアツチャコツチャの角曲がるからだろ。

「うるさいやい！分かってるさ、分かっているとも！あーそーですよ！私のせいですよーだー！」

うるさいお前。いいからとっとと進め。さあ進め。そのまま迷って餓死してしまえ。

「うわ！地味にリアル！」

お前何日迷う気だよ。

「……………」

……………

「人って何日間何も食べなかつたら死ぬんだろう……………」

あ、知らないんだ。

えーと？確か水を飲まないで1週間。食べ物を食べないで3日間だったかな？

「3日間も迷路で迷って餓死したら迷路がトラウマになるな」

しかもここは村の中。死んでもここから出られないからな。クク、ぞまあ。

「こいつウゼエー!!」

そしてやっところ着いた出口にて待ち構えるは『鬼』と化した静雄さん……と。

「あれ?もしかして私は迷った時点で死亡確定デスカ?」

確定ですネ

「嫌すぎる……。何でメウさんは静雄をパーティーに引き入れたかなあ……?」

面白いからでしょう。

ああいうクールキャラ(?)はキャラ崩れが激しいからなあ……  
……。クク。

(この子黒ーい)

なんか今失礼なこと考えなかつたか?

「H A H A H A。まつさかー」

……。まあいいや。

んじゃ、がんばって。私は静雄の方を見に行く。

「いやー!!置いてかないでー!!」

H A H A H A H A。精々迷い続ければいいさ!!

「この薄情者――――――  
――――」

〈静雄〉

「めんどくせえ……」

開口一番がソレですかい!

「……ん?コレ、壁ぶっ壊せばいいんじゃないのか?」

無視か!私のことなんぞ無視か!

つて!マジでぶっ壊す気かよ!いやね!確かに静雄はいつの間にか



いよ。

「言っておくけど私は神を信じてないよ？出会ったことがないからな」

「ここでなら会えるかもよ？」

「はあ？」

「ここでの神はGMゲームマスターだからね。

GMは静雄を探している。何でだかは知らんがな。

「GMが……」

「……ま、いつか！そんなことどーでもいいし！」

いいんだ。

「いいの！」

とゆーかそれよりも先に目の前の問題を片づける方が先決！」

……ま、静雄に殺されたくないならがんばれや。

「……マジがんばります……」

一気にテンションが下がるメウ。

「どんだけ静雄のこと怖がつてんだよお前！！」

「あ、分かれ道……」

どうすんだ？お前方向音痴だから普通にカンで進んだら迷うだけだと思っただが……？

「フッフッフッフ。なめるなよ。私もこの迷路で学んだことがある……」

「おお……で、どうすんだ？」

「まず、この杖を地面に立てる」

ふむふむ。

「次に杖から手を離す」

なるほど。

「杖が倒れた方へ進む」  
へー。……………つてー!!

これただの棒倒しじゃねーか

!!!!

「な……………!!棒倒しなめんなよ!!私はこれで地上まで戻ることができたんだぞ!!」  
なにー……………?

ちよっ、棒倒し強え!!方向音痴のメウを地上まで導くなんて!!  
「フッフ。どうだ。恐れ入ったか」

お前が威張るなよ。

「いいんだよ。この棒倒してるの私だし」  
ソレ関係あんの?

「……………たぶん」  
自信無!!

「ふんだ!私はこれで今日中に出口へついてやる!!」  
もうすぐこっちの時間では10:00だけどな。街灯があるから分かりにくいけど。

そう言われて、上を向いたメウが見たのは綺麗に輝く月だった。

「?NO……………!!」

じゃ、フウの方いくか

「フウ」

「よっほっほっ」

「……………何やってんの？」

「ん？見てわかんない？壁の上を走っているに決まっているだろう」  
「や、そんな当たり前だろ？てきな視線を向けないでいただきたいのだが。」

「ふっーやんないよ？」

「まあ静雄は別だが。」

「ま、アイツはアレだろ、めんどくさいから壁壊してみたら、目の前に出口が！……………みたいな展開になってるだろ」

「フウさん大正解！！驚くほど当たってますね！！」

「え、アイツマジでやったの？」  
「やってました」

「……………アイツらしいっちゃーアイツらしいな」

「あ、納得するんだそこ。」

「うん。だって静雄だし」

「……………あれ？なんか納得してる自分がある。」

「あはははは」

「……………お！アレ出口じゃないか？」

「ん？どれどれ……………マジだ……………！！」

「良かったな、餓死しなくて。」

「うん！マジ良かった！じゃ、飛ばすぞー！！」

ドギユウウウウウウウウウウウウウウウ

ウン！

「フウは音速を超えてるんじゃないかってほど速いスピードで出口へ」

向かっていった。  
後数秒もすれば着くかな？  
んじゃ、静雄のところまで行ってみよー！！

（静雄）

・・・・・・・・寝てるし・・・・・・・・

「ZZZ・・・・・・・・」

どこから取り出したのかも分からぬ本を顔にかぶせて静雄は寝ていた。

「あれ？静雄が寝てる」

あ、メウ。何だ、てつきりフウの方が速いと思ってた。

「棒倒しをなめるせいだ」

ほいほい、そーですねー！

ちなみにココはキャラメル村にある公園の一つ。出口はココへ繋がっていらしい。

静雄は公園のベンチで寝ている。

「寝顔・・・・・・・・見てみたいなあ・・・・・・・・」

命知らずがココにいましたね。

「・・・・・・・・うゝ分かってるよゝ。そんなことしたら静雄に殺されることぐらい」

見ちゃいなＹＯ！

「ハ！今フウの声で悪魔のささやきが！！」

見ちゃいなＹＯ！もしかしたら弱みを握れるかもだぜ

「・・・・・・・・静雄の弱み・・・・・・・・」

メウはふらふらと本へ手を伸ばす。

やめろ！メウ！お前はココで死にたいのか！

・・・・・・・・・・キナナ

イノ？

・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・」

静雄ノ寝顔ダヨ？激レアダ

ヨ？

「・・・・・・・・・・（ゴクリ）」

簡単ダヨメウ。ソノ本ヲ取レバイ

ダケダヨ？

（私は・・・・・・・・・・）

（静雄の寝顔を・・・・・・・・）

（・・・・・・・・・・見たい！！）

決断したメウの行動は速かった。

本をどかし、前髪を手でどける。

「な・・・・・・・・！！」

（か、カワイイ！！）

メウは静雄の寝顔にしばらく見とれていると、静雄が目を開けた。

「げ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・なにしてんだ？」

「・・・・・・・・・・や、べ、別に・・・・・・・・」

目を泳がせながらそう言うメウから目を逸らして静雄は自分の状況を確認し、瞬時に何があったのか把握すると、バツと立ち上がって標識を構えた。

「死ぬ覚悟は・・・・・・・・アルヨナ？」



「ちよつ、まつ！」

メウの言葉など聞き入れず、静雄は標識を振り下ろした。

: :

「なるほどねー。私がない間にそんなことがあつたんだー」  
まあな。

にしても、あの悪魔ささやきの声がやけにフウに似てたんだよね。  
………お前か？

「ハハハ！どうだろうね！！」

慌てるわけでも、動揺するわけでもなく、フウはただ、向日葵のよ  
うに笑った。

それからフウは静雄とメウに、「さ、行くぞ！」と、声をかけてか  
ら公園の出口へ歩き出した。

その右隣を静雄が、左隣をメウが一緒に歩き、フウはまた、笑った。

誰よりも無邪気な、歪み無き笑

顔を。

空には満月が輝いていた。

嗚呼。ココからでも現実の神に声が届くのであれば、せめて、小さ  
な祈りを。

うに

あの笑顔が、消えること無いよ





私の願いは、とても小さな願い。されど、神にも叶えられぬ願い。

ある意味疫病神。でもそれ以上に幸運に恵まれているかもしれない。それが静雄

ごめんなさい!!

なんか最近謝ってばっかな気がするけど

ごめんなさい!!

別に何か忙しいことがあった訳じゃないんだよ。

だから………まあ………遅れた理由は察してください!!

こんな作者だけに見捨てないでください!!

それとサブタイトル長くてごめんね!

前回までは

あめ村(迷路)という大難関を乗り越えた3人(主にフウとメウ)は遂にキヤラメル村へとたどり着いた!

しかしここでもやっぱり厄介ごとに巻き込まれてしまうのだった………?

ある意味疫病神。でもそれ以上に幸運に恵まれているかもしれない。それが静雄

「……………? (キヨロキヨロ)」

「フウ、どったの? んなキヨロキヨロして」

「……………んーいや? なんでもここはキャラメル村なのに村がキャラメルでできてないんだろっなーって思って」

「……………」

「アホか……………!!!!!!」

ガツ ブオン ドゴォ!!

メウはフウの腰を掴むと、イナバウワの要領でフウの頭をレンガ造りの道へ突き刺した。

えーと? 何だっけ!? こーゆー技があったような無かったような気がしないでもない!!

「どうでもよくないか? それ」

分かってなーな静雄! こうあと少しで思い出せそうになるとむしろに思い出したくなるんだよ。

「あーそれ分かるかしんねー」

……………いや、同意してくれたのは嬉しいんだけどな、メウ。

その道に突き刺さったままのフウをどうにかしてから会話に参加してくれねーか?

「……………あぁ」

ポム。と手を打ったメウはフウの足を掴むと引っ張り上げた。

「よっこいしょーと（ズボ）」

メウが抜いたフウは気絶していた。

「……んじゃ行くか」

静雄はタバコを吸いながら歩き出した。

「ああ……またこのパターンか」

はあ……。とため息をついてメウはフウのことを担ぎ上げて静雄の後をついていった。

：  
：  
：

かれこれあって約5時間後

フウは目を覚ますと、泥だらけの顔をそこらへんにあつた公衆トイレで顔を洗ってきた。

その際フウはトイレ汚かった。とわめていたが……。

「静雄ー疲れたあー」

「一回どっかで休もーよ」

「……（イライラ）」

「ねーしーずーちゃん」

「……（ガシ）」

はいはい、街中ではそんなグロイことはやっちゃ駄目ですよー

「……（ズルズル）」

「……いやー!!やめてー!!」

静雄はフウとメウの頭を掴んだまま路地裏へと入っていった。

見せられないよ!! (〇〇:)

少しすると振り返り血を大量に浴びた静雄が路地裏から出てきた。

あ、あのー? 静雄サン?

「アア?」

フウとメウどーするんですかい?

「そのうち生き返ってくんだろ」

「……ま、そうk「見つけたー……!」……は

あ……今度はなんですかー?

「誰かと聞かれたら名乗るのが礼儀というもの! 私の名前は『ルア・シャドー』だ!」

「誰もテメーのことなんか聞いてねーよ」

「!!!(ガーン)」

なんか落ち込んでますがそんなことは置いて、私の台詞をさえぎったくせして生意気なルア<sup>この女</sup>は、見るからに怪しい黒いフード付きのマントを頭からすっぽりとかぶり、手には真っ黒な本。口にはチュッ○チャッ○スを銜えていた。  
つかすごいね。私だと口にチュッ○チャッ○ス銜えたまま喋ると口から落ちちゃうんだよね。

「ハッ! ザコが」

やんのかそこのテメエ!!

見るからにザコそくなヤツに『ザコ』とは言われたくねえなあ!!

「どこをどう見たらザコに見えんだよ、この薄らハゲ!!」



ハゲてねえし！

「……だが、そこまで言うのならテーマがザコじゃないって証明して見せるよ。」

静雄に勝つてさ。

「いいよ。私が負けたらパーティーに入ってる。それでいいだろう？」

その言葉、絶対後で後悔するぞ？

「ハッ！吠えてろ」

こうして自分の名誉を賭けた勝負が始まった

「俺の意見は丸無視か……」

仲間が1人増えるから結果オーライって事で。( ^ o ^ ) b

「はぁ……。とつとと終わらせんぞ」

それは静かな 死刑宣告

いざ！尋常に……。始め！！

「走れ閃光 落ちろ稲妻 暗き闇で輝いた光！『黒雷』」

ルアの持っていた本がひとりでに開くと、そこから黒い稲妻が飛び出し、静雄へと向かっていくが……

「いない！？」

稲妻は空を切る。

ルアの背後へ移動した静雄は横薙ぎに標識を振り、ルアを吹き飛ばす。

「……ちなみに住人とかその他もろもろは既に避難済みなので巻き込まれることは無かったりとかする。

壁にめり込んだルアの首へ静雄の標識が迫る。

「さすがに及ばなかったか……最強の名は伊達じゃないってね」

その言葉を最後にルアは血の噴水へと変わった。(ようは頸動脈が切れたわけです)

グロイよ静雄サン!!

「……あー……その……なんだ? 街中でのグロテスクな殺し方はやめような?」

状況が全く掴めていないフウの言葉を最後にルアによる謎の襲撃事件は幕を閉じたのだった……。

: : :

「さて、全員が生き返ったところで」

「『自己紹介と行きますか!』」

「……あんだ等出会ったばっかなのに息ぴったりだな。

「やーなんか同じ様な人間の匂いがするんだよね」

ほーどんな?

「『静雄と同じパーティーに入ったことを後悔している人達?』」

「……………」

「んで、自己紹介だけど」

「私は『フウ』。一応このパーティーのリーダーだ。職業は『忍者暗殺課』」

「私は『メウ』。職業は『魔法使い』で、LVは20な」

「私は『ルア・シャドー』。職業は『黒魔術師』でLVはメウと同じだな」

「『よろしく〜』(ノシ)」

こいつらよくハモンな〜。

私は『天の声』。ナレーションみたいなもんだ。さて。

「『静雄は?』」

もちろんやるよな?という目線で静雄を見る3人。

「……………平和島 静雄』職業は『アニメキャラ』LVはその時によって変わる」

ふんふん。なるほど。

で?どうするの?この後。

「武器屋に行きたいかな?」

「あ、それにはさんせい」

「んじゃ武器屋行くか」

……………再び忘れ去られる静雄……………。

「……………(イラ)」

: : :

武器屋

「?コレは……!まさかのレアアイテム……!」  
メウ

「ふむ……コレとコレを買えばそれなりに戦闘の幅が広がるのだが……いかにせん高い」

「チュツ○チャツ○スは何処かなーっと」 ルア……って……  
……分かるよね?

「……お譲ちゃん。チュツ○チャツ○スはココには売ってないよ?」

「……なに!!!?」

「や、当たり前でしょ。ココ武器屋だし」 フウ

と、そんな感じでかれこれ1時間。

静雄は買つものがないため先に武器屋を出て、他の3人を待っていた。

……ココだけの話、実は全員静雄から5000円ずつ貰っていたりとかする。

「なはー(^^)いい買い物したー」

「ふむ。これだけあれば大丈夫かな?」

「ふっふふーん。チュツ○チャツ○スー」

お帰り。その様子だといいいものが買えたみたいだね。  
何買ったの?

「私は『カクセイザイLV10』、『魔法銃LV10』、『炎の杖』  
だね」

(……あいかわらずコイツは法律で禁止されてるものか……)

「私は『手裏剣』、『陰陽ノ短剣』、『クナイ』、『クナイつき爆  
発札』、『手榴弾』だ」

(こつちもギリギリ危険ゾーンか)

「私は『黒き本』、『タロット』、『ステッキ』、『手袋』、『手錠』、『ナイフ』、『チュッ○チャッ○ス』だぜ」

(手錠と手袋とナイフは何に使うんだよ。つーかどんだけコイツはチュッ○チャッ○スが好きなんだよ)

「長げーんだよテメーら。買い物ぐらいとつとと終わらせる」

「「すみませんでしたあ!!!」(DOGGEZA)「「「

「.....で?他に何処に行くんだ?」

「んー?特にはないからもうこの村はでちゃってオツケーかな?」

フウ

「えー!またあの迷路通るのかー?」メウ

「文句いつてんじゃねーよ」

「.....はっ」

「.....あのさあ。私、別にあめ村通らなくてもこの村から出る方法知ってるよ?」

.....

「「それを早く言えよ!」!」

「あ、アハハハハハ(^o^;)」

「んで?なんだよその方法とやらは。聞いてから殺すから」

「黒の教団にある『転移装置』。それがこの村から出る方法だ」

クルクルと、回る廻る。

運命の歯車がゆっくり、ゆっくりと……………

動き出す……………。



「つか、私死んだわ」  
ルア



ある意味疫病神。でもそれ以上に幸運に恵まれているかもしれない。それが静雄

はあ………。

また厄介ごとに巻き込まれそうですね。

ちなみに『黒の教団』はD・Gディーグレイマンのアレです。

分からない人はとりあえず崖の上にある黒い塔だと思ってください。大体そんなかんじなんで。

ちなみに出て来るのはその場所と、エクソシストという職業だけなので。

期待した人ゴメンネ

あ、まってまって！石投げないで！ごめんね、ごめんなさい！

ごめんなさいあああああ  
いいいいいいいい！！！！

黒の教団……ではなく、その前の閑話的なもの（ただし話は繋がって  
今回はそれなりのはやさ……かな？

大震災が起こる中こんな小説投稿していいのかと思うちかなのでし  
た。

〜前回までは〜

ルアが仲間になった！  
黒の教団へ行くことになった！

以上！！

黒の教団……ではなく、その前の閑話的なもの（ただし話は繋がって

「と、言う訳でやってきました『黒の教団』！！」

「あ……1つ、言わせてもらっていいかなフウさん」

「なんだいメウさん」

「悪の組織……じゃ、無いんだよね？」

「止める、星○が悲しむ。ディー○レでも主人公が同じ様なこと言  
ってるけど」

それでいいのが主人公

「なつかしいな……ピタ○ラス○ツチの十本ア○メか」 ルア

「あれは面白かった。もう見てないけど」 フウ

「お父さ○スイ。チも面白かった」 メウ

「あゝあれね。」

「……つかさあ。このネタにどれだけの読者がついていけている  
のかねえ？」 フウ

「……さあ？もしかしたらかなりの人がパソコン、もしくは  
ケータイの前で頭をひねっているのかもしれないし」

「じゃ、このネタ止めるか。静雄がさつきから話題に入ってこない  
ところを見ると静雄もピタ○ラス○ツチを知らないようだし」

「え……マジ？」

「……俺はテレビなんて見なかったからな」

「……お前人生最大の失態だぞそれは」

「俺の人生全否定か」

「冷静なツツコミですね静雄サン」

「黙れフウ」

「ひどくねえ？それ」

「で、いつ黒の教団に入るんだよ」

「無視かよ私は。」

黒の教団には今すぐにでも入りたいところなんですけれども……

フウは後ろにいるメウとルアをチラリと見て、ため息をつきながら言った。

「この崖を登れないとか戯言を言いやがる者が2名ほどいるんですよねえ」

「「なはははははは」(=)」「」

「この様子だと戯言じゃなくて本当みたいだけだな  
だなあ……ハア(・口・)」3

「いやいやいや！！だって明らかに90°だぜ!？」

「魔法使用の私達にとつては確実に登れない角度ですよ!？」  
体力が無い

「と、ゆーわけで静雄と私で1人ずつ背負わなきゃいけないんだよ  
ねえ。さすがに2人は無理だし」

「殺せば軽くなるだろ」

「静雄、さりげなく怖い発言するな。方法としては確実だがな」

「「やめれ!!」」

「チツ。しゃーねー。静雄、ルア持って。私がメウを持つから」

「めんどくせえ」

「そんな事言うなよ。もしうるさかったら落としてもいいけど。助

けないし」

「わかった」

「うなずくなよー!!」

「じゃ、いくか、静雄」

「私達の名前が入ってない!」

「黙れ荷物」

「ぐっ……」 事実ゆえに言い返せない2人

こうしてルアは静雄が。

メウはフウが背負って崖を登っていった。

「黒の教団に着いてるのに入るまでに1話使うのはどうかと思うよ  
作者」 フウ

「うな。わかつているぞ。」

「よっしゃ!んじゃいくぞ!」

『黒の教団』へ!!

黒の教団 内部

ズル……ズル……

「はあ、はあ、はあ……」

血塗れになった足を引きずりながら黒い戦闘服を着た少女は何かから逃げていた。

「仲間を……探さないと……駄目……ですかね……」

。そう言った少女の胸にはローズクロスが輝いていた……

黒の教団へ潜入！そして其処に待ち構えていたのは……（前書き）

遅れて申し訳ございませんでしたああああああ!!!!!!!!

今回はきちんと言い訳ができます!! 所詮言い訳ですけどね!!

コホン、では私の魂の叫びをお聞きください

中学忙しすぎんだよバカヤロー-----!!!!!!

以上が言い訳でございます！

では、ごゆっくりとお楽しみください。短いんですけどね!!

黒の教団へ潜入！そして其処に待ち構えていたのは……

「あー……………ちよーつとルアさん？」

「……………何？メウ」

「黒の教団つてこーゆーとこだっけ？」

「いや、黒の教団は比較的平和なダンジョンだったはずだぞ？」

「じゃ、さ、なんでこんな事になってんだ？」

「……………」

黒の教団の門を開けたフウ達が目にしたのは広がる血の海と、無数の死体だった

「……………なーさー何、暗くなってんの？これゲームだし、暗くなったらこの物語成たたねーぞ？」

「や、フウ、だって死体だけ？いくらゲームつってもリアルすぎてな……………」

「……………もう……………見慣れた」

「は？」

「だってメウもルアも皆（主に静雄によって）死にまくってんじゃないん」

「……………なる」

そこ、納得しちゃうんだ。てかそれでいいんだ。

「……………いいんじゃない？事実だし」

「……………あーそーですか

「んで、静雄はなんかしんね？こーゆーじょーきょーについてメウが隣で黙っている静雄に聞く



「聞きてエか？」

「何そのもつたいぶり。聞きたいに決まってんじゃん」

「この黒の教団はな、イベントが一番多いダンジョンなんだよ」

イベントとはダンジョンで一定の条件をクリアすると発生するものである。基本的にはそれほど難易度は高くはないのだが……

「ココのイベントはやけに難易度がたけーんだよな……」

「……マジ……マジ……マジ……？」「」

マジです。

ちなみに言っておくがイベントが起こると、入ることはできても出ることはできないからな。

「んなこと知つとるわボケエー！」

んな怒んなよフウ。

それよりもこのイベントが何なのかを突き止めるほうが先だろ、じやねーと解決できねーんだから。

「は？なんで？ふつーイベントが起きたらイベントアナウンスが流れて、このイベントの説明とかしてくれるんじゃないの？」　メウ

「ココのイベントはめんどくせーことにイベントアナウンスが聞けねーんだよ。エクソシスト以外はな」

「静雄……」

「アア？」

「……なんで今日はそんなに優しいの？悪いものでも食べた？」

「……」

ザシユ！　　ザシユ！

ザシユ！

今ココに新たな死体が3つ追加された。

「エクソシストを探すぞ」

「……ソレはいいけど返り血は落としてからね？」

：

（数分後）

「ツチ 誰もいねーか」

静雄は誰も居ない食堂を見回すと、そうつぶやいた。

「誰も居ないっておかしくねーか？最低でもNPCの一人くらい居るはずだろ」

黒の教団の中は物音一つせず、異様な静けさが漂っていた。

「……確かに誰も居ないのはおかしいな。これじゃ情報が集まらねえ。」

「PCも居ない。全員殺られたか？いくらなんでも人っ子一人居ないのはな……」

他の場所を探していたフウ達が戻ってきたが、収穫は無い様だ。使えねーやつら。

「……黙れよ。テメーも収穫なしだろうが」

うつせーなあ。こちとら自由に動き回れるわけじゃねーんだよ。

「まずお前らが黙れ。聞こえるもんも聞こえなくなるんだよ」

「……はい……」

この部屋で最後か？まだ行った事無い部屋とかがありそうだが……

「あいつらが他の部屋全てを見てきたんだったら食堂で最後だな」

だとしたらバグか？

なにやっつてんだよGMは。

「「「あー……そのことなんだけどさ」「」

「アア？」

「二つ、まだ行けてない部屋があるんだよな」

「……なんでソレを速くいわねーんだよ（怒）」

「痛い痛い痛い！！」

壁は頭をこすり付けるためにあるんじゃないと思う！！」

静雄はなぜかメウの頭だけを掴み高速で壁に頭をこすりつけた。

しばらくすると摩擦で煙が出てきたので終了。

メウは前髪が軽くこげる程度で済んだのだった。

「被害は前髪だけじゃないから！！お前の目は節穴か！！」

お、よく見るとおでこも悲惨なことになってたわ（笑）

「この腐れ外道め！！」

や、意味わからんし。

「……入らなかった部屋なんだけど、一つは黒い壁みたいなものがあって先に進めない部屋で」

ほう……なかなか怪しい部屋ではないか。

「もう一つは……」

中を見た訳じゃないのになんだかすごく震えが止まらない、そんな機械音が鳴り響いている部屋だよ」

……

「とりあえず機械音は後回しだ。先に黒い壁がある部屋に行くぞ」

「「「ランチャー了解！！」」

ラボ  
研究室

「コレがその黒い壁か……」  
「うん。そだよ」

入ることを拒絶するような真っ黒な闇色に染められた壁はただ黙として何も語らず、ただ其処にあるだけであつた。

「……とりあえずは実力行使だな」  
ズルリと、静雄はお決まりであるかの様に『止まれ』と書かれた標識を取り出した。

「この壁……壊せんのか？」  
「ま、何とかなるでしょ」

「そうそ、どつちにしる一番怪しいのはココなんだから確かめないといけないし」  
上からメウ、フウ、ルアである。

「……」  
静雄は無言で標識を構えると、大きく振りかぶり、渾身の力をこめて壁へと叩きつけた。

ズガアアアアアアアアン！！

誰よりもその威力を知っているフウ達は、この壁が静雄の攻撃に耐えられるとは微塵も思っていなかった。  
しかし

「……な……！！」「」

その壁には傷一つつかず、先ほどとまったく変わらぬその姿をさらしていた。

全員が驚愕の顔をあらわにする中、見知らぬ声が聞こえた。

「なに………やってるんですか？」

声が出た先には片手に回復薬が入っていたと思われるビンを持った一人の少女が立っていた。

黒の教団へ潜入！そして其処に待ち構えていたのは……（後書き）

どうでしたか？

なんかやたらめったら話が進んでませんけどね（苦）

次の更新は中学校生活に慣れたころなので未定です。

気長にお待ちください。夏休み前か、夏休み中に更新予定です（一応）

あとはまじめな話。

3月11日の地震から既に二ヶ月以上。

いまだに原発は安定せず、余震も完全に収まったとはいえない状況です。

それでも確かに、日本は復興へと歩んでいます。

当たり前の日常が1日も速く訪れることを祈って……。

仲間とは、時によくわからない展開から生まれることがある（前書き）

前回よりは早く投稿できましたかね。

今回も例によって話が驚くべきほどに進んでいません。

ま、じゃっかん引つ張りすぎ感は作者にもあるんですが、

作者の気力とか、体力とか、時間とか、文才とかの都合でこうゆう結果におちいつているわけです。

皆さん、こんな作者でよければ着いてきてください！！

では、今回も笑って頂けると嬉しいです！

〜前回までは〜

『黒の教団』へとやってきたフウ達は謎のイベントに巻き込まれる！！

エクソシストに会うこともできず、静雄の力でも破壊できない黒い壁に戸惑うフウ達のもとに1人の少女が現れた！

彼女の正体は？目的は？全ての謎が明らかになる！？

仲間とは、時によくわからない展開から生まれることがある

「なに……………やってるんですか？」

静雄たち一行がやってきた通路とは反対の通路からやってきた謎の美少女（ゲームだから）は哀れむような視線をこちらへ向けていた。「いや、哀れむような視線はしてませんけど」

いま「は」って言ったよな。じゃあどんな目線だったわけだ？

「主に若干引きながら『うわ……………なにやってるんだろ？』という感情をこめた目線ですね」

「……………同じようなもんだろ」「……………」

……………確かにな。

「しょうがないでしょう。破壊不能の壁に攻撃をしてる人がいたらそんな目線を向けたくなくなります」

「あ、これ破壊不能なんだ」

謎の美少女 長いので以下“謎の” の言葉に黒い壁をペチペチと叩きながらフウはそう返した。

（……………略称が……………）（……………）

「はい。エクソシストしか知りませんが」

「……………ならわたし達（俺達）が知ってるわけないだろ」「……………」

「……………そうですね。よく見たらエクソシストじゃなかったです」

「よく見なくてもわかるわ。お前の目は節穴かよ」

「熊に言われたくないです」

「アホな娘にも言われたくないですねえ」



メウがそう言い返すが、謎のは急に自信たっぷりな顔になり、こう言った。

「その点に関しては大丈夫です。いずれもつとアホな娘に逢いますから」

「……どんな予言!?」「」

「私に宿る神がそう告げてます」

「あ、何だ。ただの中二病か」

「失礼ですね。私はただ二次元に憧れてるだけです」

「ゲームの中だけじゃ満足できないのか?」

「……ココ、ゲームの中でしたね……」

「駄目だ。私この子と会話が出来ない」

たった6行ほどでルアは謎のとの会話を断念したようだ。

「すみません、最近物忘れが多くて」

だからといって今自分がいる世界すら忘れるのはもはや病院レヴェルでは?

「誰か私のことを殴って今の恥ずかしい記憶を消してくれませんか?」

「んな急にエ○ザみたいなことを言われて

ド「オー!!」

もっ「

メウが言葉を言い終るよりも先に、何者かが謎のことを殴り飛ばした。

「……ちよ、静雄さ……」

謎ののことを殴ったのは静雄のようだな。

しかし急にどうしたんだ？

「いや、殴ってくれと言われたから殴っただけだが……」

「……まさかの天然!?」「」

「確信犯だ」

「余計に悪質ですよ……」

謎のは体についた砂埃を払いながら言った。

「どうやら静雄も一応は手加減したらしい。といっても謎のHPはレッドゾーンだが。」

しかし自身のHPには目もくれず、謎のは静雄をビシッと指差した。

「ですがそれだけの強さがあれば私と一緒に戦うことができます!」

上から目線キターーーーーー? (0口0)

静雄ですら呆れてしまっているほどにこの世界の人間は相手のLVを全く見ないようだ。

「ようは馬鹿なんだな」

そういつた静雄の声すら謎のには聞こえていないようだ。

「私をあなたのパーティーに入れてください!!! いや、むしろ入れる。です!」

遂には命令口調となつてしまった謎のだが、入るものを拒まず、出るものは徹底的な粛清をガッツのフウは、入りたいと志願するものを突き放す訳がない。

謎のの手をガツチリと握り締めたフウは

「喜んで!」

と、快く(?) 謎ののパーティーメンバー介入を認めたのだった。名前も聞いてないのにな。

「……そういえばまだ聞いてなかったな（ませんでしたね）。  
名前」「……」

（自己紹介タイム）

「私はフウ。このパーティーのパーティーリーダーだ。職業は『忍者暗殺科』。よろしくな！」

「私はメウ。職業は『魔法使い』だ。っつーことでヨロ」

「私はルア。名前2文字のヤツ多くな？とか思っなよ。職業は『黒魔術師』。OK？」

「………静雄だ」

「ぶつきらぼうですね」

そんなことはどうでもいいから早く名乗れよ謎の。

「その略称止めてください。」

えっと、私の名前はフウカです。職業は見ての通り『エクソシスト』です。よろしくお願いします」

腰までであると思われる茶色の髪をポニーテールにし、ローズクロスが胸に入った黒い団服を身に纏ったフウカは髪と同色のわずかにたれた目を細めて綺麗に笑った。

：

「んでさ、結局このイベントの目的って何なの？」

何処となくほのぼのとした空気が薄れてきたころ、フウはこのイベントを即急に終わらせるべく、唯一このイベントの全容を知るフウカにこのイベントの目的を尋ねた。

「詳しい経緯は省きますが、このイベントではこの黒い壁の向こう側にいる魔獣を倒すことが目的です。この黒い壁の向こう側にいるのはエクソシストか、もしくはエクソシストが所属するパーティーだけとなります」

「なるほどな。ちなみにこの先の魔獣の姿はもう見てきたのか？」  
フウカの説明に納得したような表情を見せた一行だが、フウはもう1つ疑問をぶつけた。

「はい。ですが予想よりも強かったため、命からがら逃げてきたって感じですね。LV的に言えばLV50でした」

「フウカのLVは・・・っと、LV22か。確かにこのLVじゃLV50の魔獣は1人じゃ無理があるな」

「はい。ですから皆さんに協力して欲しいんです。お願い・・・できますか？」

フウカの声が心配するかのように小さくなる。  
だが、

「あつたりめーだ！仲間だしな！！」

フウ、

「パーティーリーダーは頼りねーが、ま、力になることぐらいは出来るぜ？」

メウ、

「もとよりそれが目的だからな。心配すんなって」

ルア、

「さっさと終わらせるぞ」

静雄には

その心配、まっつっつっつたくらいらないと思うよ。私は。

「ありがとうございます・・・」

やっぱり笑顔が一番だな女の子は。少なくとも泣きそうな顔よりはな。

それじゃ、パーティーリーダーさん？

「ぶっ倒しに行きますか！！」

フウの言葉と共に、フウカが壁に手を当てると、フウたちの周りが光の輪に包まれ、魔獣の元へと転移した。



「うんうん。順調に進んでいるようで何よりだよ。あと少し、もう少しで俺も、そっちに行くからさ」

それは何処とも知れぬ真つ白な空間。

その中心でさまざまに機械に囲まれたとある男は、とても楽しそうに嬉しそうに笑った。

仲間とは、時によくわからない展開から生まれることがある（後書き）

次回が『お菓子の国』最終話となります。  
期待せよ！！

次回予告

フウたちの目の前に現れるLV50の魔獣！

静雄いるし楽勝じゃね？と思われたが、なんとその静雄が戦闘放棄  
！？

「お前らのためだ」とか言ってるがその真意はいかに……。

もっいっこお知らせ

今回、この小説を、少しだけ書き直すことになりました。  
といっても一からやり直すのではなく、少し編集するだけですが。  
変更点については、次話の後書きにて説明いたします。  
次回の投稿は8月中にしたいと思っています。では！！



番外編 気がついたらいつの間にかPVが10000を越えていた

「祝！PV10000突破

記念！！」

「……突破したのか」

そっだぜ静雄。

作者が久しぶりにアクセス解析見たら突破してたそうなの。

「完全に行き当たりばったり小説ですね、この作品」

「だからこそ、何のネタもなく番外編をやってるんだろ」

呆れたような声で溜め息をつくメウ。

「本編では完全にラスボス直前的雰囲気なんですけどね……  
確かにな。

……ところでフウはさっきから何やってるんだ？

「この部屋の中に大量にある紙の使い道を考えてた」

「……あー……」

思わず静雄も納得したような声を出すほど、作者が作り出したこの部屋にはやたら紙が置いてある。

なぜかメモ用紙ぐらいの大きさのやつが。

「んじゃ『いつどこで誰が何をどうしたゲーム』でもやるか」

ポムツと手をたたきながらルアが名案を思いついたかのように言う。

「……何ソレ？」

説明しよう……！

このゲームは全員が紙を一枚ずつ持ち、まず『いつ』を書き込む。次に、『いつ』を書いた場所が見えない様に折り、左隣の人に渡す。んで、渡された紙に『どこで』を書き込む。

同じように『いつ』、『どこで』、『誰が』、『何を』、『どうした』を書き込んでいき、最後に、それを読み上げていくゲームだ。

「ちなみになぜか文が繋がらないことがほとんど無い」

後はやたら前に書いたやつに関連が高いものが出てきたりとかな。

「ふーん。なかなか面白そうだな」

「このまま時間を無駄に消費するよりはマシだろうし……」

「やりますかねー」

上からフウ、メウ、フウカで、全員賛同するような言葉を言うが、

「俺はやらねーぞ」

どうやら静雄はやらないようだ。

「……確かにやらなそうな雰囲気があったがマジでやらんか……」

ルアは若干落胆したように言うが、静雄はそんなこと眼中にはないようで、適当に紙をどけて、さっさと寝てしまった。

「しゃーない、私らだけでやるか」

「一回目 書き込み中」

「んじゃ、開くぞー」

せーのっの合図で全員が開く。

「「「「……（プルプル）「「「」

どうやら全員すごいのができたらしいな。

一枚目 フウ

「三年後 みんなの前で 静雄が クジラを ボコボコにする」

「「「静雄ならやりそうだ(です)!!」「」」

「とゆーかみんなの前って……私達のことか?」

「え、やんの? 静雄三年後に私達の前でクジラボコボコにしてんの?」

「「「……」「」 やらないようなやるような、微妙なところなので何も言えない……んじゃ次。」

二枚目 メウ

「昨日 街中で フウカが ウルトラマンを 潰した」

「「「かわいい顔してなんてことを!!」「」」

「やってませんよ!!」

ウルトラマン……安らかに……。

「あなたもですか!!」  
はい次々。

三枚目 フウカ

「今日 世界の中心で の 太が ドラ もんとアン ンマンを 食べた」

「「「機械は食べちゃダメー……!!」「」」  
とゆーか世界の中心で食べた意味が分からん。

「アンパンマンはどこまで食べたんだらうな?」

「やっぱ顔だけじゃないか?」

その前に体はうまいのだらうか……?」

「……身体もパン?」

……

なんか審議が始まりそうなのでチャツチャと次に行っちゃいませう。

四枚目 ルア

「え……これ読むの？」

「いいからチャツチャと読んじやってください。じゃ・な・い・と・  
……（黒笑）」

「読ませていただきます!!」

（……ふ、フウカ……？）

「んじや逝くぞ？」

ルア、漢字違うから。

「コホン、えーと？」

ウ コ年ウ コ月ウ コ日 公衆トイレで ウン が ン子に

ウンコ を渡していた」

「……ゴメン、コレ伏字の意味ある（ありま  
すか）？」

「私に聞くな！つか誰だよ一番最後に書いたやつ！もはや伏字にす  
らなつてねえ！」

つかよー。何このシンク口率。全員ソレっぽいこと書いてんじやね  
ーか。

もしかして狙ったのか？

「……いや、完全にただの偶然です」

私は今日、偶然はとても怖いのだと知りました、まる

：

「んじや二回目と行くかー!!」

あー……そこで元気に叫ぶフウさん？

残念なお知らせですよー。

「だが断るー!!」

まだなんも言っていないうえに、それパクリ!!

「はいはい。

んで?」

作者のネタと時間が尽きたので、残念ながらココでお終いだ。

「……マジ(ですか)?」「」「」

マジー!!

とゆー訳で最後のあいさつを主人公(仮)ヨロ

「………はあ。

しゃーない」

「えーと、まだまだこの小説は未熟な点が多く、日本語がおかしかったり、誤字脱字があったり、展開が急だったりします。

それでも、私達の冒険がちょっとでも皆さんの笑顔に繋がっていただけたら幸いです。

………つて!難しい話はわたしにやわかんねーし!  
だから………」

この小説が完結するまで、ずっと読者の皆に愛されたら万事解決でOKだから!

そしてできれば小説家を夢見るこのダメダメ作者の背中を押してくれたら………うれしいかな?」

「……私達がここまでやってこれたのもひとえに読者の皆様のおかげです!! 静雄もきつとそう思ってるから!

これからよろしくお願いします!」「」「」

では、また次回で

黒の教団にて、イベント終了 ～ 『お菓子の国編 最終話』 ～ (前書き)

1ヶ月以上かかってしまいましたね……。

夏休みの課題がぜんぜん終わらなかったもので……。

今、ようやく終わりが見えてきたので投稿です。

……今回は難産でした……。

～前回までは～

新たな仲間フウカに黒の教団で起きているイベントを一緒に終わらせて欲しいと言われたフウたち。快く了承したフウ達は、中にいる魔獣を倒すべく、転移した。

黒の教団にて、イベント終了 ～『お菓子の国編 最終話』～

漆黒の巨体、鋭利なツメが生えた太い足、長い首の先には、牙がずらりと生えた口があり……ま、簡単に言えば黒いドラゴンだな。

とりあえず、縦は20メートル、横は羽を広げたら50メートルぐらいのやつがドドンって広間みたいな場所にいるわけですね、はい。

「黒いなー」

「見上げてると首が痛くなりそうです」

「ただのでかい的だろ」

上からフウ、フウカ、静雄の3人がおのおのの感想をつけるなか、常識人（笑）であるメウとルアは

「「LV50だからってデカ過ぎだろー——————」  
「——————」

めっさ叫んでました。

「「うるさい（です）」」

「「……………」」

『グルルルルル……………』

あ、ほら2人が騒ぐから見つかっちゃったじゃん。

「「……………ごめんなさい」」

「どつちみち見つかるんだからあんまし関係ないと思っけどね」

「そんなことより皆さん、攻撃きますよ?」

ドラゴンはすでに攻撃態勢になっていた。

「あぶなっ!」



フウがメウとルアの襟首を掴んで横にとぶと同時に、

ドゴォー！

一瞬前まで自分たちがいた場所は見えない何かにより、大きく削れていた。

「……衝撃波!?」

しかし驚く間もなく第2撃が迫る。

「バリア！」

「黒盾！」

「守護結界一ノ陣！」

避けられないと悟ったフウ達は、防御することでやり過ごした。

「皆さん！大丈夫ですか!？」

「……だいじょーぶ！」

フウはルアの『黒盾』の後ろにいたので何とか防御を破られることはなかった。

「やられてばっかじゃいらねーよなっ!」『ファイヤ』!」

メウの胸を狙った攻撃は避けられることもなくあたるが、HPは極僅かしか削ることができない。

「防御力高けえな!!」『黒雷』」

「LV50ですからねっ!」『拡散弾』」

2人の攻撃もやはりHPを大きく削ることはなかったが、ドラゴンの体を覆っている鱗の一部に罅がはいる。

「でも、完全ではないみたいだぜ。食らえ！」

フウが投げたクナイつき起爆札は狙いどおり罅にあたり、爆発した。

『ゲギヤアアアアアアアア!』

高い防御力があるドラゴンだが、鱗を砕いた一撃はさすがに効いたらしい。

「うるせーよ！『バブル』！」

ドラゴンの周りに泡が大量に現れる。

ドラゴンはそれらを全て尻尾でなぎ払う。

当然爆発するバブルだが、たいしたダメージもあたえられず、ドラゴンも痛がるそぶりを見せない。

『ガアアアアアアア！』

お返しとでも言うようにドラゴンは口から黒い炎を出す。

固まると集中狙いにされると考えたフウ達は、全員バラバラの場所へ逃げる。

ドゴォー！！

しかし、全方向への衝撃波がドラゴンから放たれる。

「がはっ……！！！」

一番ＬＶの低いフウはとっさに結界をはるが、あっさり突き破られ背後の壁に叩きつけられた。

「一気に半分以上もってかれたか……。運良く目の前にあった柱と結界がなければ今ので終わってたな」

運良く柱によってダメージを軽減したフウだが、残りのHPが半分もない今の状況では攻撃が掠っただけでもHPは0になるだろう。

「ここで回復薬を使うのは得策ではないか……」

HPが満タンであってもフウはドラゴンの一撃で戦闘不能になってしまう。それならば味方のために1本でも多く回復薬は残しておくほうがいいだろうと考えた結論だった。

「へたには動けねーが……」

ドラゴンがメウの『ファイヤ』をうけ、こちら側に背を向けたこと確認すると、フウは身を隠すものを探すべく移動を開始した。

(フウも生きてたみてーだな)

フウが移動を開始したのを反対側の通路から見ていたルアは、メウと同様にドラゴンの前に姿を現した。

「見た感じだいいじょぶそうだなルア」

「おめーもな。・・・くるぞ！」

ドラゴンの太い尻尾の攻撃を左右にとんでよけた2人は詠唱を始める。

「終焉へと導け、絶望の歌 『破滅の歌姫』！」

耳が痛くなりそうなほどの高音が響くと、ドラゴンへ衝撃波が襲った。

「来たれ炎の精！触れたものを焼き尽くせ！『火炎』！」

ファイヤよりも大きな火球がドラゴンへと放たれる。

中級魔法はそれなりに効くらしく、それなりに大きくHPを削ることに成功した。

だがドラゴンもやられっぱなしというわけではない。

鉤爪がせまる。

とっさに防御した2人だが、防御に罅がはいってしまった。

ドラゴンは追撃に炎を放とうとするが、背中に銃弾を受け振り返った。

「敵はそちらだけではないですよ！！！」

背後には銃を構えたフウカがいた。

『グルル・・・』

尻尾を振り回し、フウカを叩き潰そうとするが、ルアの魔法『時の呪縛』により一瞬動きを止めるドラゴン。その間に尻尾の射程範囲から抜け出すフウカ。

ドラゴンの攻撃は空振りに終わった。

その後も少しずつ、しかし着実にダメージを与えていく3人。ついにHPも残り3分の1となったドラゴンをみてフウカは

「でかいのあてます！少し時間を稼いでください！！！」と叫んだ。

「了解！！！」

そうは言ったものの、HPが少なくなりさらに凶暴化したドラゴン相手に2人だけでは抑えるのも限界があった。

「ぐあつ……！！」

衝撃波を避けたメウだったが、その先に待ち構えていた尻尾をもろにくらってしまった。

ついにHPもレッドゾーンにはいったメウ。

止めを刺そうとドラゴンの口から炎が吐き出される。

防御も助けも間に合わないと思われたが、メウは何者かに襟首をつかまれ、炎の射程範囲から逃れる。

「フウ！！」

メウを助けたのは隠密性スキルを使いドラゴンに気づかれないように近くまで来ていたフウだった。

「時間、稼ぐんだろ？私も協力するぜ」

そう言ったフウは手の中で短刀を一回転させた。

「ちよつとドラゴンの目、潰してくるから援護よろしく！」

「あ、おい！」

返事も聞かずに走り出した。

衝撃波を避け、ドラゴンの体に移る。

迫る炎をルアの『黒盾』が防いでいる間に、持ち前の運動神経を生かしていつきに頭まで駆け上がる。

『グオオオオオ！』

突如としてドラゴンの体から生えてきた刃をほとんど勘だけでよけ、右目の上までたどり着き、持っていた短刀をドラゴンの右目へ突き刺した。

『ギヤアアアアア！！』

痛みによる咆哮でバランスを崩したフウはドラゴンの頭から落下する。

空中で避けることができないフウに、ドラゴンの牙が迫る。

「っ……！！」

思わず目を瞑ったフウだが、横から誰かに引つ張られ、牙はフウに

あたる事はなかった。

「戦闘不能になったら経験値はもらえないからな。LVを上げるチャンス逃したくなかっただけだ」

「静雄……」

フウを助けた静雄は適当な柱に標識を突き立てその上に立った。標識はミシツときしんだ音をたてたが折れることはなかった。そのとき、

「全武器開放！『銃声の音色』」

フウカの後ろから現れたのは、大量の銃。

それがいつせいにドラゴンへと銃弾を撃ちだした。

ドラゴンの羽を守るように広がるが、それすらを突き破りドラゴンへダメージを与えていく。

全ての銃声がやむと、地に倒れ伏したドラゴンの姿があった。

カシャアアアアアアアン

ガラスが砕けるような音がすると、ドラゴンは跡形もなく消え去った。

「……お、終わった（わりました）……」

静雄以外の全員のHPとMPは尽きかけ、全員ポロポロだ。

それでもキュイイイイイインと経験値の貯まる音がすると、

「……やったー！……」

と全員ハイタッチを交わす。（ただし静雄はぬいて）

こうしてフウはLV10に

メウはLV22に

ルアはLV23に

フウカはLV28へとそれぞれ成長した。

その後フウカの案内で回復をすませ、転移装置へと向かう。

「いよいよお菓子の国ともお別れか」

「LVも上がったし、仲間も増えたし、まだまだ楽しくなりそうだな」

「次はどこ行くんだ？」

「LVを上げて中ボス戦でも面白そうですね」

上からフウ、メウ、ルア、フウカ。

ま、なにもともあれ無事倒せてよかったじゃないか。お疲れさん。

「「「「おう（はい）！」「」」」」

転移装置前

「それじゃあ、行きましようか」

全員が乗り込んだことを確認するとフウカは機械を操作し起動させた。

今度はお菓子国の外へ、フウたちパーティーは転移していった。

黒の教団にて、イベント終了 ～ 『お菓子の国編 最終話』 ～ (後書き)

今回はギャグなしの本気戦闘シーンでした。

本気なので、これ以上は期待しないでください(泣)

～次回予告～

お菓子の国から無事転移したかに思われたフウたちだったが、転移した先でとある人を踏んでしまう!!

「俺は魔王だっ!」

必要以上にチャライ自称魔王にフウ達は何を思う……。

次回! 『自分で自分のことを偉いって言うやつはたいがいたただの下  
っ端』

またよろしくお願いしますね byフウカ

自分で自分のことを偉いって言うヤツは大概ただの下っ端（前書き）

・・・更新遅れまくって申し訳ございません  
最近イベントがたてこんでおりまして・・・。

次のテスト期間が終わったらしばらく落ち着くので、投稿スピード  
が上がります。

それまで待つただけだと幸いです。

・・・次の更新は11月の後半・・・だといいなあ・・・

（前回までは）

魔獣を無事倒したフウたち一行。

転移装置も無事起動したし、ようやく一安心かと思いきや！！

「・・・俺は・・・今日ほどこのゲームを今すぐログアウト  
したいと思ったことはない」

静雄のキャラも崩壊の超ハイペース冒険バトルコメディ！

ついに敵キャラ登場（？）のたぶん24話！！

「自分で自分のことを偉いって言うヤツは大概ただの下っ端」



自分で自分のことを偉いって言うヤツは大概ただの下っ端

「絞殺、撲殺、暗殺、毒殺、自殺、他殺、射殺、抹殺、どれが良いか言ってみなさい……………」

そこはとある森の中……………」。

大剣を突きつけられ、押し倒された男と突きつけて、男の上に馬乗りになっている女。

明らかに絶体絶命なこの男だが、なんともご愁傷様なことで周りには誰も……………どころか魔獣さえ一匹もない。

「ちょ、ちょっと待て！確かにお前のお家に無断で入ったのは悪かった！…！だがいくらなんでもここまで怒る必要はないだろ！！」

「悪かった？その程度で済まされるとでも思ってるの？コレで何回目か答えてみなさい」

「な、7回目で（ドスツ）ぎゃ……………！！！？？」

答えた男の顔の隣の地面に剣が突き刺さる。

「あらごめんなさい。手が滑ってしまったわ」

私には故意にしかみえなかつたな……………」。

「ところで……………あなたは どうしていつもいつも。私の寝室に転移してくるかしら？」

どうやらこの男。転移の魔法で女の寝室によく入ってくるらしい……………最低だな。

「寛大な私はリビングやキッチンならその日一日を私の奴隷として過ごすだけで許してあげるのに……………さすがに寝室にこられたんじゃ、その程度じゃ許して上げられないの……………」

「い、今のどこが寛大だったんだよ……………」

「ただ、あなたがペットや家畜同然の動物なら入ることを許してあげるわ」

「ほら・・・生意気に人語を喋るんじゃないわよ。ブーとお鳴きなさい。豚」

「ヒツ・・・!!」

女の背後からあふれ出る真っ黒なオーラにただただ怯えるしかない男。

「あら鳴かないの？それとも愚かな豚は自分が人間だとも思っているのかしら？」

本当に不思議そうな顔をする女。女の目には男はただの豚にしか映っていないようだ。

「ちきしょっ・・・!!」

男は無詠唱で転移を使い、女から逃げ出すが、無詠唱なためあまり移動することができずすぐさま立ち上がり追ってきた女から逃げ出すべく走り出した。

: : :

転移、完了しました

そんなアナウンスと共にフウたちは地面に降りた

「ぎゅむ!!」

ちたかったなあ。

そんな私の願望は届くことなくフウカは転移地点の下に居た誰かを踏んでしまった。

「.....誰だ(ですか)?」「.....」

フウカが踏んでいるのは鮮やかな金髪にピアス。それに真っ黒い服という、謎の格好の人物だった。

「それよりもまず退けよ!!」

.....よく顔がうつ伏せになった状態で喋れるなアンタ.....

・・・

「あ、すみません」

フウカが退くと、男は勢いよく立ち上がった。

男の顔は・・・・・・・・ま、イケメンの部類だろう。しかし・・・・・・・・なぜだろうか？

男から出るチャラ男のようなオーラと、何かを探すような挙動不審な動作が全てを台無しにしている。

「・・・・・・・・よし、まだ追いつかれてないな」

男はどうやら何かに追われているようだ。

「・・・・・・・・で、お前は誰？」

なんとなくきりがよさそうなので話しかけるフウ。すると、男の目がキラリツと光り。

「俺は魔王だつ！！」

「さて、次はどこに行く？」

「うーん・・・・・・・・そろそろ中ボス戦もやりたいしな・・・・・・・・」

「どこかに拠点を構えてLV上げに徹するとかは？」

「でも拠点を構えるにしても、どこかの町か村かに行かなければいけませんし・・・・・・・・」

「拠点を構えるには金がかかる」

上からフウ、メウ、ルア、フウカ、静雄だ。

拠点を構えるには3つの方法がある。

1つ目はホテルに宿泊すること。町の中にあるため安全面は保障できるが、この人数だと必然的に料金は高くなるし、長時期泊まるとなるとさすがに金がもたないだろう。

2つ目は家を建てること。町の中に建てることはできないので、必然的に町の外に建てることになる。そうすると安全面は野宿よりは

マシ程度。金は町の外なのでホテルの宿泊よりはかからないが、水道費、電気代、ガス代などなど、ローン以外にも払うものが多い。危険性と維持費が釣り合わないからあまりお勧めはできない。

3つ目はテント。開けた場所や森の中、川の近くなど、立てる場所は自由だが、安全性は全くといっていいほどない。金ほとんどかからないが……ま、物好きか、金がないやつらか、冒険中のやつらがとる手段だな。ちなみに移動可能の拠点です。

「今はテントを拠点にしていますが……」

「正直言って危ないよな」

フウカの言葉を続けるようにメウが言う。

「拠点については今後の課題だな。今は近くの森でテントを張ってLV上げでいいだろう」

「……なんか急に会話に参加するようになったね（なりましたね）  
静雄」

「……」

気にするな、作者の都合だ。

「いや、どんなつg」俺様を無視するな——————！！」  
「アア？」

フウカが踏み潰していた男が急に叫んだ。台詞を遮られたフウは機嫌が悪い。

「……」なんだよ（なんですか）魔王（自称）「」「」

「（自称）はいらねーよ！！てか息びつたりだなお前等！！」

「あ、そう。ありがとう魔王（自称）」

「俺の話の前半聞いてたか！？」

「……あ、ゴメン。P Pに集中してた」

「P Pやってねーだろーが！！」

フウと魔王（自称）がよくわからないツツコミとボケを繰り返して中、とある人物が現れた！！

「見つけたわよ、家畜！さあ靴をお舐めなさい！！」

「来やがったー！！！！！！！！！！」

現れたのはそう、先ほど魔王（自称）を豚と呼んだ人物であった。

（家畜！？魔王（自称）ってあの女の人の家畜なの！？）ヒソヒソ

（女の人はPCプレイヤーのようだから・・・）ヒソヒソ

（魔王（自称）はあの女の人に負けて家畜同然にまで成り下がったのか？）ヒソヒソ

（（謎の女の人・・・恐るべし！！））

「靴を舐める私をそのまま足蹴にして豚と罵ってください！！」

「・・・俺は・・・今日ほどこのゲームを今すぐログアウトしたいと思った日はない」

フウ、メウ、ルアの3人は、謎の女の人に恐怖を抱き、

フウカはM属性を開花させ、

静雄は迫りくる混沌カオスにキャラを崩壊させるのだった。



自分で自分のことを偉いって言うヤツは大概ただの下っ端（後書き）

（次回予告）

すでになにがなんだかわからなくなっているこの展開！

頼み綱の静雄はキャラ崩壊中！？

そして今回出番があまりなかった謎の女の正体は？

いったいどうなる次回！

「二重人格？いいえ、性格にONとOFFがあるだけです」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6069m/>

---

消えない絆

2011年11月9日23時13分発行